

菊鹿町文化財調査報告 第3集

さる がえし  
猿 返 城 跡  
こめ やま  
米 の 山 城 跡

—— くまべやかた  
隈部館関連の砦跡 ——

1997年

か もと きく か  
熊本県鹿本郡菊鹿町教育委員会

## ご挨拶



中世の菊鹿町は、菊池氏の重臣として知られた隈部一族の領地でした。隈部氏は、町北部の上永野地区に館を構え、周辺の山々には砦を築きました。「隈部系図」によりますと、少なくとも16世紀半ばの天文年間に、隈部貞明が在した事は確かな様です。

肥後の中世が終わりを告げるのは、天正8年(1578)の「肥後の国衆一揆」ですが、隈部一族も、これに参加しましたので、乱の終結後、重い処分を受けています。この時、隈部氏の持ち城は、館を含めて、すべて廃城になったものと思われます。

それから、約420年の歳月が流れましたが、館跡は、高所にあったことが幸いして、遺構が非常に良く残っています。野外展示された建物跡や庭園跡などから、往時の隈部氏の生活ぶりを偲ぶことができます。特に、建物跡の構造から、茶湯をも楽しんだ形跡が伺えると伝え聞きます。

この館跡は、昭和49年に発掘調査が行われ、平成5年度には、測量調査が実施されております。県指定史跡として、県内に数多い城館跡の中でもトップクラスの遺跡として知られており、町民の誇りとする遺跡でもあります。

その一方で、標高600~700mクラスの高山にある猿返城跡と米の山城跡については、余りの高所にあるため、これまで、本格的な学術調査がなされた事はなく、踏査記録に留まっています。元来は、隈部館とセットをなす重要な砦跡であることは、言うまでもありません。

この事に関して、地元の有志の方々から「隈部館に縁の深い両砦跡の本格的な調査ができるのだろうか。山中には、地元しか知り得ない遺構も数多く残っている。これらを本格的に調べて、その結果を正確に後世へ伝えたい。もし、調査が実施される時は、協力を惜しまない」との有り難い申し入れがありました。

同じくして、中世城の研究者で、町とも繋がりの深い、熊本県文化課主幹の大田幸博氏からも「猿返城跡も米の山城跡も、隈部館跡の防衛網として極めて貴重な砦跡である。機会があれば、町と一緒に調査に取り組みたい。特に、この様な高所の砦跡調査は、個人の力では不可能である」と相談がありましたので、教育委員会とも話合って、平成8年度に調査費を計上して、測量調査を実施する事になったのです。

調査には、実に、多くの困難が伴った様ですが、こうして調査報告書も完成し、発刊の運びとなりました。関係各位の並々ならぬ御努力に深く感謝いたします。折しも、町の南部では、県の手によって、古代山城の「鞠智城跡」の調査と整備が進行中であります。歴史公園の完成を、町でも非常に期待していますが、将来的には、隈部館跡と砦跡をセットにした中世ゾーンと、鞠智城跡の古代山城ゾーンとを絡めた広域的な、遺跡の保存と活用ができますなら、幸いに存じます。

平成9年3月31日

菊鹿町長 隈部弘正

## 序 文

今回、菊鹿町教育委員会では、隈部館跡周辺の砦跡について、測量調査を実施いたしました。猿返城跡と米の山城跡は、八方ヶ岳山系の尾根筋に残っていますが、山深い標高600～700mクラスの山頂域に築城されているため、気軽に登れる所ではありません。特に、猿返城跡は、ここ50年近く人の手が加わっていない雑木山で、登山道の確保から始めなければなりませんでした。米の山城跡についても、猪が数多く出没する所でもあり、人里離れた高所での調査でありましたので、事務局としましては、まずもって事故防止に注意を払いいました。特に、冬場に至り、現場が積雪の状態となった際は、なおさらのことでした。

調査は一年かかりましたが、関係者が、それぞれの役割分担の上で、最大の努力を行った結果、この様な調査報告書が完成いたしました。先に教育委員会が作成しました『隈部館跡』調査報告書と合わせて、御活用願いますなら、幸いに存じます。

最後になりましたが、調査に従事されました関係者の方々に、厚く御礼を申し上げます。

平成9年3月31日

菊鹿町教育長 平 嶋 靖 弘

## 例　言

- 1．本書は、熊本県鹿本郡菊鹿町に所在する猿返城跡・米の山城跡の測量調査の報告書である。
- 2．調査は菊鹿町教育委員会が主体となり、測量調査は大田幸博氏〔熊本県教育庁文化課主幹〕が行った。
- 3．本書の執筆・遺跡の写真撮影は大田氏が行った。
- 4．図面の整理・編集実務作業は石工みゆき氏と溝口真由美氏が行った。

## 目 次

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査の組織	1
第2節 調査の経緯	1
第3節 調査の取り組み	1
第4節 菊鹿町について	1
猿返城跡・米の山城跡への道順	2
第Ⅱ章 調査の成果	7
隈部館跡	7
猿返城跡	13
米の山城跡	26
第Ⅲ章 まとめ	41
近世・近代の文献に見える猿返城跡・米の山城跡	42

## 図 版 目 次

第1図 菊鹿町位置図	2	第13図 米の山城跡周辺地形図	27
第2図 菊鹿町地形図および中世城跡分布図	3	第14図 米の山城跡全体測量図①	29
第3図 隅部館跡・猿返城跡・米の山城跡周辺地形図	5	第15図 米の山城跡全体測量図②	31
第4図 上永野地区(中世の城下町)周辺地形図	9	第16図 米の山城跡グリッド設定図	34
第5図 隅部館全体測量図	11	第17図 米の山城跡測量図①	35
第6図 猿返城跡周辺地形図	14	第18図 米の山城跡測量図②	35
第7図 猿返城跡全体測量図	17	第19図 米の山城跡測量図③	36
第8図 猿返城跡グリッド設定図	20	第20図 米の山城跡測量図④	37
第9図 猿返城跡測量図①	21	第21図 米の山城跡測量図⑤	38
第10図 猿返城跡測量図②	23	第22図 米の山城跡測量図⑥	39
第11図 猿返城跡測量図③	24	第23図 米の山城跡測量図⑦	40
第12図 猿返城跡測量図④	25		

## 写 真 図 版

- 図版1 猿返城跡・米の山城跡・八方ヶ岳 遠景（七城町から望む）  
図版2 猿返城跡・米の山城跡・八方ヶ岳 遠景（下永野地区から望む）  
図版3 猿返城跡・米の山城跡・八方ヶ岳 航空写真  
図版4 八方ヶ岳・米の山城跡北東側の深谷（米の山城跡から望む）  
図版5 虎口城跡〔菊池市〕（米の山城跡から望む）  
図版6 隅部館跡・桑原・高池地区（猿返山から望む）  
図版7 隅部館跡 航空写真  
図版8 猿返城跡 遠景（年山地区から望む） 図版28 湧水地 中央部  
図版9 猿返城跡 遠景（桑原地区から望む） 図版29 米の山城跡から猿返城跡への道  
図版10 猿返城跡 城床（猿返山から望む） 図版30 猿返城跡から見た雪景色の米の山城跡  
図版11 猿返城跡 山頂土壘 図版31 米の山城跡 山頂 虎口  
図版12 猿返城跡 Ⅱ郭の濠跡と土壘 図版32 米の山城跡 山頂 大土壘  
図版13 猿返城跡 Ⅱ郭とⅢ郭 図版33 米の山城跡 山頂南縁 小土壘  
図版14 猿返城跡 Ⅲ郭と巨石 図版34 米の山城跡 山頂南縁 小土壘に伴う石列  
図版15 猿返城跡 Ⅴ郭-① 国版35 米の山城跡 山頂南縁 小土壘に伴う石列  
図版16 猿返城跡 野首地形の南東下・登城道 国版36 米の山城跡 山頂南縁 小土壘に伴う石列  
図版17 猿返山と城床の間の登城道（野首地形） 国版37 米の山城跡 南斜面平場 南縁土壘（石壘を伴う）  
図版18 猿返山（城床のⅣ郭から望む） 国版38 米の山城跡 南斜面 東側小土壘(石列を伴う)  
図版19 猿返山 山頂 国版39 米の山城跡 追地西端部の石壘側面  
図版20 登城道途中の平場（標高513.2m地点） 国版40 米の山城跡 追地西端部の石壘正面  
図版21 猿返城跡東下の野首地形 国版41 米の山城跡 追地西端部 溝池状の凹地  
図版22 測量調査従事者 国版42 米の山城跡 堀切1・2  
図版23 猿返城跡から米の山城跡への道 国版43 米の山城跡 堀切1  
図版24 水汲み道（湧水地へ降りる道） 国版44 米の山城跡 堀切1  
図版25 湧水地の谷間 国版45 米の山城跡 堀切3  
図版26 湧水地 全景 国版46 米の山城跡 堀切3  
図版27 湧水地 南端 国版47 米の山城跡 堀切4

## 第Ⅰ章 調査の概要

### 第1節 調査の組織

調査主体 菊鹿町教育委員会  
調査責任者 平嶋靖弘〔菊鹿町教育長〕  
調査者 大田幸博〔熊本県教育庁文化課主幹〕  
協力者 竹下輝幸〔菊鹿町文化財保護委員〕  
調査事務局 岩井賢太〔菊鹿町社会教育課長〕 井上咲雄〔同課係長〕 飯川康秀〔同課主査〕  
報告書作成 大田幸博 石工みゆき 溝口真由美  
測量補助員 永田六三子 青木祐子 青木勝哉  
伐採作業員 中満二人〔元・菊鹿町文化財保護委員〕 丸山敏郎〔菊鹿町文化財保護委員〕 勢田高司

### 第2節 調査の経緯

町内には、県指定史跡の「隈部館」をはじめとして、猿返城跡・米の山城跡・山内城跡・日渡城跡・山ノ井城跡・若宮城跡・鷺取城跡の所在が確認されている。この中で、特に隈部館跡は、礎石建物跡や庭園跡などの残存状況から、県内に残る約600城跡の中でも、頂点を極める遺跡として県内外で注目される。

隈部館跡は、平成5年度に菊鹿町教育委員会により、測量と文献調査が実施され、その成果は菊鹿町文化財調査報告第2集で、報告済である。今回は、この館の周辺にある城跡(砦跡)の測量調査を実施した。調査の対象となった「猿返城跡」と「米の山城跡」は、高所の山岳に所在する砦跡として、良く知られており、正式な調査が待たれるところであった。ちなみに、今回の測量結果をまとめた調査報告書は、平成7年度に発刊された「菊鹿町史」の補足資料である。

### 第3節 調査の取り組み

菊鹿町教育委員会が調査の主体となり、測量作業の立案計画を行った。調査は中世城研究家で、町と縁の深い熊本県文化課主幹の大田幸博氏を中心となって行い、測量のための雑木や下草の伐採作業については、上永野地区の中満二人氏をはじめとして、丸山敏郎氏と勢田高司氏から、大いなる助力を得た。

桧山の米の山城跡はともかく、猿返城跡の山頂区域は、雑木の繁茂するところで、伐採作業は困難を極めた。中満氏の言によれば、この山に人の手が入ったのは、実に50年ぶりとの事であった。加えて、両城跡へ至る山道は、当初、案内無しでは、入山できない程の深山で、中満氏が木の枝に結んだビニールテープを頼りに山頂を目指した。折しも、暮れから年明けにかけて、山頂域は、常に積雪の状態で、調査スタッフを悩ませた。この条件下で、青木祐子さんと永田六三子さんが、最後まで、測量調査の補助を勤められた。さらに、折に振れて、町文化財保護委員の竹下輝幸氏が、調査を手伝った。報告書の作成は、石工みゆきさんと溝口真由美さんが中心となって行った。

(飯川康秀)

### 第4節 菊鹿町について

熊本県の北端部に位置し、北東部は三国山(993.8m)の稜線を境に福岡と大分の両県に接している。行政域は、東西10.9km、南北12.3km(いずれも最大数値)で、総面積77.38km<sup>2</sup>。北南方向を主軸とした場合、北から南へ狭くなっているので、逆三角形に近い形状となる。

町の東部から北部にかけて、八方ヶ岳、三国山、国見山等の標高1,000m級の高山が連なっており、これから流れ出る水がまとまって上内田川となる。この川は町内を北から南へ貫いており、流域は水田地帯となっている。地勢は、菊鹿盆地とも称されるように、北方に高山を荷い、南方へ丘陵地が緩傾斜するが、菊池市にかかる地点に辺部がある。南下には、広大な菊池平野が広がっている。

猿返城跡や米の山城跡が所在するのは、八方ヶ岳の南側山系で、山頂域は標高650mから750mの稜線上にある。

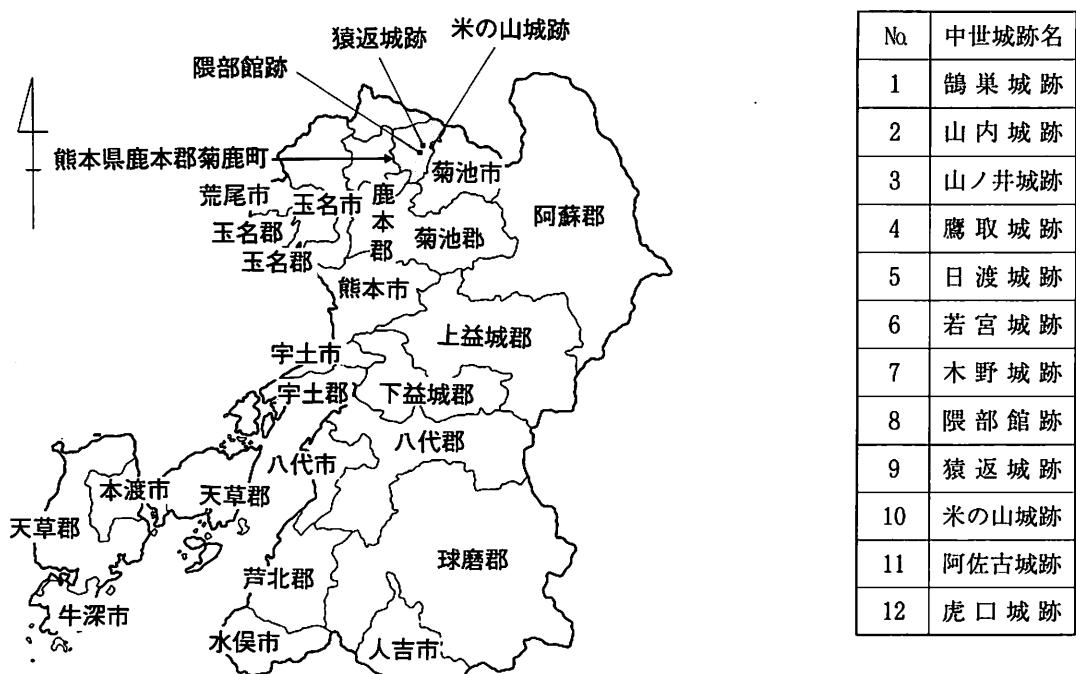
### 猿返城跡・米の山城跡への道順

(1) 菊鹿町役場から県道37号線を北東方向へ進むと、宮原地区の三叉路に出る。これを左折すると、程無くして上永野地区の構口<sup>かまえぐち</sup>の三叉路に至る。役場からの距離は2.3km。この構口から右折して北方向への坂道を直線的に1.9km上ると、桑原地区から隈部館へ上がる道がある。これを左手に見て、桑原・高池地区を抜けて、林道八方ヶ岳線に出ると、2.1km先で左側肩部に林道横尾線への分岐点が見える。

ここから簡易舗装の横尾線を登っていくと、1.5km先のヤブの切れ目に、猿返城跡の登城口がある。これより先の道順は、ここを起點とする。

0.2km先には、砂防ダムを左手に見る。この箇所の山腹は平成5年の豪雨の際に、大規模な土砂崩れを起こしている。0.9km進むと、林道は二俣に分れるので、これを左折して、さらに登っていくと、1.5km先で狭い砂利道となる。林道は1.7kmの地点で、終わっている。最終地点には、米の山城跡と八方ヶ岳へ至る登り口がある。

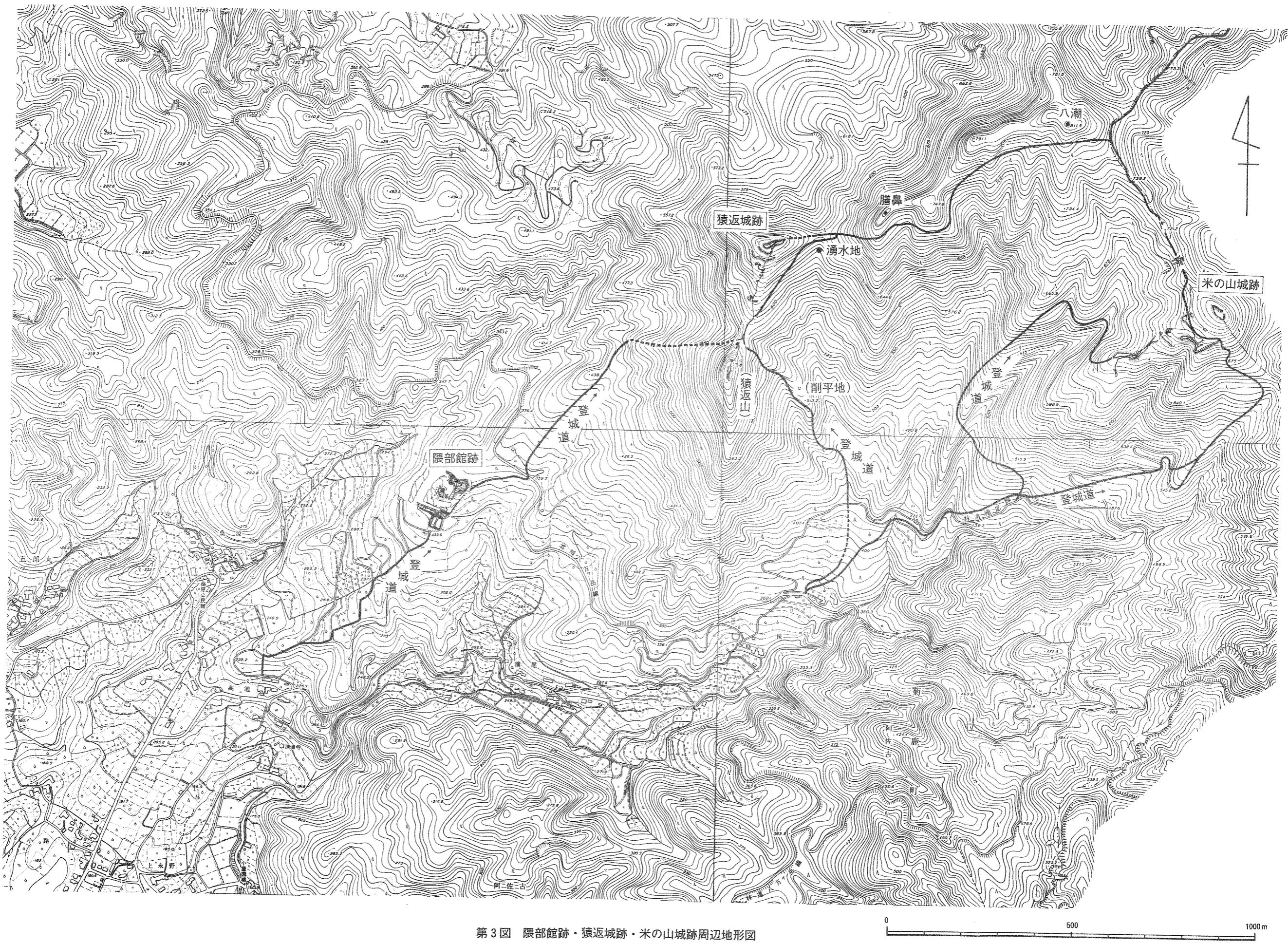
(2) 桑原地区からミカン畠の開墾時に造られたつづら折り道を1.8km登りきると隈部館に出る。ここから館の東縁沿いを進むと、林道八方ヶ岳線に出る。この三叉路は、館の北縁でもある。ここから猿返城跡の登城口までは2.7km、米の山城跡の登城口までは4.4kmも離れている。



第1図 菊鹿町位置図



第2図 菊鹿町地形図および中世城跡分布図



第3図 隈部館跡・猿返城跡・米の山城跡周辺地形図

## 第Ⅱ章 調査の成果

### はじめに

猿返城跡と米の山城跡は、立地的なものから、明らかに隈部館跡の防衛網を構成した中世城跡(砦跡)である。したがって、これら2城跡の調査報告をする前に、隈部館跡のガイダンス的なものから触れていきたい。

### 隈 部 館 跡

#### 概 要

町北部の上永野地区にあり、中世城館跡として、県内では第一号の県指定史跡である。八方ヶ岳(標高1026m)山系の南西側山腹に造られており、最高地点の標高は347mを示す。麓の桑原や高池の集落からも、110m～140m近い高低差があり、館跡の所在地として極めて異例である。町役場(標高120m)の北側台地からは、山腹中に延びた馬蹄形の尾根線に取り囲まれている様子がよくわかる。館跡地は、南辺部が半開きになった盆地の様で、遠くから見れば、空中都市のような地形をしている。当時、館の建物は、かなり遠くからも眺める事ができたと思われる。

館跡には、礎石建物跡や庭園跡等が、今もほぼ完全な形で残っている。昭和40年代末から50年代の初期にかけて、発掘調査が行われており、その後、遺構は埋め戻す事なく野外展示されている。その為、中心部は歴史公園の様になっており、特に、山桜と山つつじが開花する春には、多くの人が訪れている。近くを林道八方ヶ岳線が通っている事もあって、高所とは言え、アクセス面での問題はない。周辺の尾根線に、今回、調査を行った「猿返城」と「米の山城」と呼ばれる山頂部分がある。これらは、隈部館を守る砦と伝えられており、標高600～700mクラスの高山にある。

館名については、中世文書に「隈部館」と明記したものはない。江戸時代の『肥後国誌』に、「猿返城」として「永野城とも言い隈部親永が築城した。城跡には大型枠型の跡、若殿の部屋の跡と伝えられる礎石、庭石、泉水の跡、花園の跡などが歴然と残っている。親永の平時の住まいは城外にあり館と府の行程は八里とされている」との記述がある。さらに『古城考』は「猿返城」、『国郡一統誌』は「隈部城」、『新撰事蹟通考』は「長野城」と記している。地元では「御屋敷」「隈部さん」と称し、「隈部館」の呼称は昭和49年3月に県指定史跡となった際に命名されて以後、定着した。

#### 侍屋敷と麓集落

館跡から、山道を下ると桑原と高池の麓集落がある。山道の一部には「登城道」という伝えも残っている。山腹に侍屋敷が点在したという伝えもあるが、一帯は館跡を除いて昭和30年代の初期にミカン畑に開墾されたため、はっきりしない。(伝)富田安芸守の家老屋敷跡は現存するが、(伝)多久大和守の家老屋敷跡は大正時代に掘削されて溜池となっている。隈部氏の城下町は、桑原と高池以外にも飛び地の集落が含まれている事が確実である。現に、桑原から南方へ2.3km(直線距離)下った幸山と津留の五叉路に、大手口を意味する「構口」の地名が残っており、その近くに中世寺院の造音寺跡もある。上永野地区全体が、一つの中世・城下町であろう。

## 隈部氏

隈部氏の始まりは大和源氏の宇野親治で、保元の乱（1156）後、親治と業治が菊池氏に預けられて肥後へ下つたと『隈部姓系図』にある。同系図は、持直が文永元年（1264）に菊池武房から「隈部」の家号を賜ったとしている。

鎌倉末から南北朝には赤星氏、城氏と共に菊池宗家に仕えたが、この時期、隈部氏の中で最も活躍したのは忠直である。重朝の代は筆頭家老の職にあり、戦国期の菊池文化を代表する人物でもあった。文明13年（1481）に隈府で行われた「萬句連歌興行」では中心的な役割を果たしている。

隈部宗家は、武治（忠直の曾孫）の時に猿返城（隈部館を示す）へ移り、貞明も、この城を本拠地にしたという。親家（貞明の子）や親永（親家の子）による築城説もあるが、系図は貞明の没年を天文8年（1539）とし、清潭寺（上永野地区の高池に現存する）に葬るとしているので、貞明の代に、上永野へ移り住んだのは確かなようである。

親永は永禄2年（1559）に、木野親政の旧領地をめぐって赤星道雲（親家）と争った。この「合勢（瀬）川の戦い」で隈部は大勝したが、赤星は、合戦後も大友を背景に菊池城主として勢力を維持した。親永は、これに対抗して肥前の龍造寺に助力を求めていた。天正8年（1579）の龍造寺軍の攻撃で、親隆（親家の子）は菊池城を退却したので、親永が新しい城主となった。肥後の北部は龍造寺が支配し、隈部は中心的な位置を占めたが、天正13年（1584）に島津が肥後を制覇した。

天正15年（1586）に秀吉が九州を統一すると、肥後には佐々成政が入国した。この時、52人の国衆に給知安堵の朱印が与えられたが、旧領の総てが安堵されたわけではなく、隈部氏の場合は、1900町から800町へ、大きく減ぜられている。この政策は反発を招き、同年、肥後の国衆一揆が起った。一揆は、程なく鎮圧されたが、これによって肥後の旧中世勢力が完全に一掃される事になった。隈部も一揆に加わったので、親永と親房は柳川に、親元と兼元は小倉に預かりとなり、翌年に亡くなっている。

## 館の構造と遺構（建物跡・池跡など）

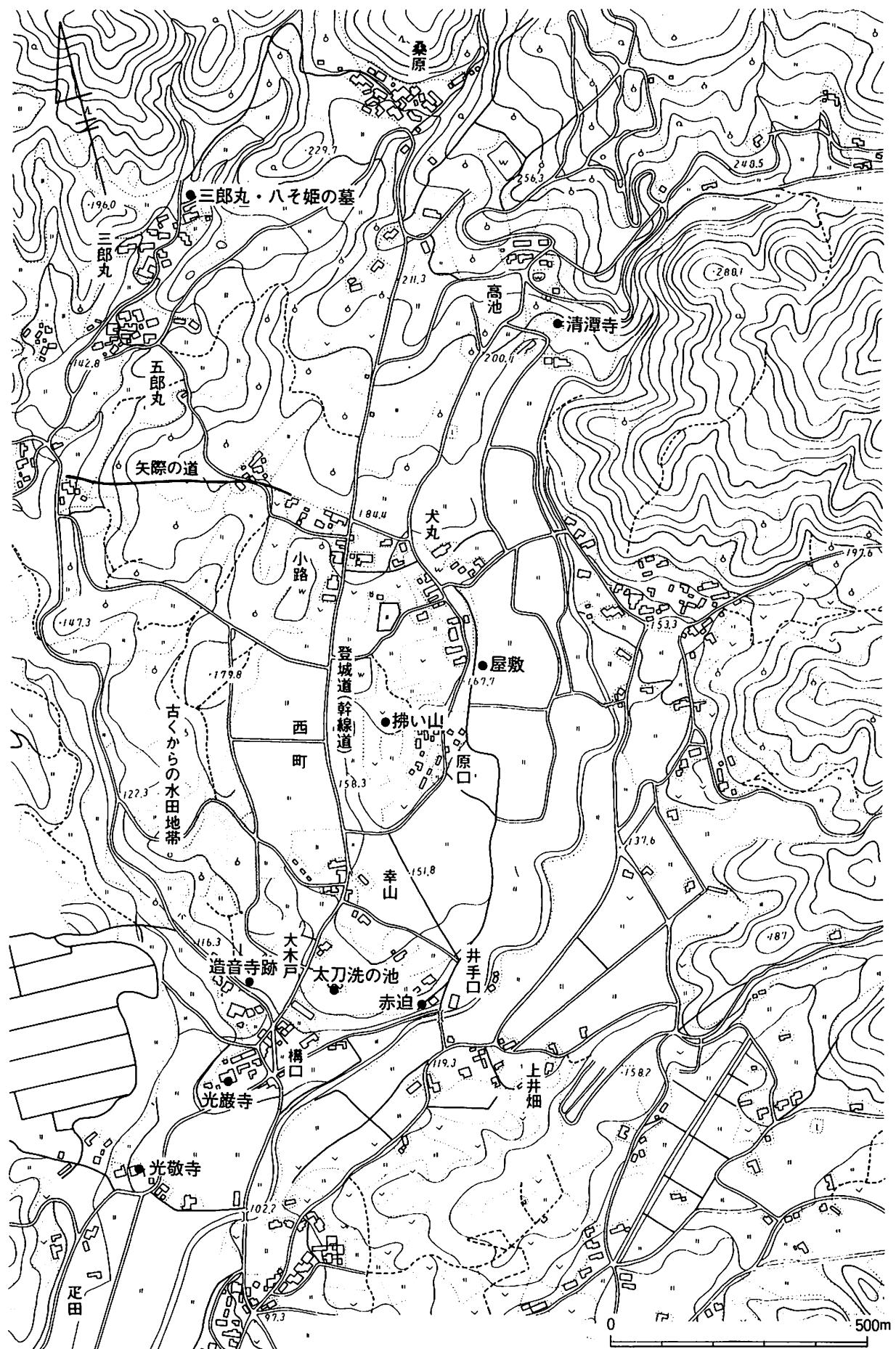
館跡は単郭形式で、南北60m、東西85mの平場が「主郭」である。人工的な平場で、山腹の削り度合いは東西方向にはっきりしている。尾根筋にあたる南北方向は、北側から南側への緩やかな傾斜地となっている。

礎石建物1は、5間×7間で、梁行9.25m、桁行13.65m。柱間は桁行で1.95m。梁桁は1.95mと1.70mに分かれる。礎石建物2は4間×4間で、桁行7.80m、梁行7.70m。東側を除く3方に縁が付いている。桁行の柱間は建物1と同様に1.95mで、梁行は2.4mと1.4mに分かれる。形状から、建物1が副殿で、建物2が主殿と推定される。

礎石建物2の北東側には小岩の密集箇所がある。長さ11.3mの石列を境に、12.5m×12mの範囲が、さらながら賽の川原の様相を呈している。この中で6m×11.5mの範囲は、長方形の区画が造り出されている所から建物跡との見方がある。転び根太を固定化させるための小岩群であろうと思われる。この中に炉跡と思われる円形の石列も含まれている。

庭園跡は礎石建物2の南東側にあり心字形をしている。13m×12mの大きさに掘り窪められており、心字形の池を中心とした庭造りが残っている。築山には自然石を利用した立石もあり、立地からして枯山水と思われるが、池のくびれ部は呑み口のようでもあり、泉水の可能性も強い。周辺に配されたに偏平な大岩は、庭園を眺めるための踏石と思われる。

この他、建物に伴う雨落ち遺構と石組み排水路があり、石畳や、館の北側出入口にあたる石垣も残っている。建物敷地が、そのまま埋め込まれた感がある。



第4図 上永野地区（中世の城下町）周辺地形図

## 隈部神社

主郭の北東側の高台にあって、 $25\text{m} \times 11.5\text{m}$  の平場に神殿（御神体は、隈部親永の木像）と拝殿が建っている。神社の位置は主郭の鬼門にあたり、戦神や屋敷神が祭られた場所と思われる。神社の背後には中規模造りの堀切が残っている。長さ35m、上場幅4.5m、下場幅2m。狭い意味で主郭の北限をなす遺構であるが、山腹に続く上位の北側尾根筋には、さらに2条の小規模な堀切が残っている。

## 堀切

主郭の南下に大規模造りの堀切が残っている。主郭の南縁に沿って直線的に掘られており、長さ75m、堀底の東端部と主郭との高低差は7.8mもある。主郭の南法面にあたる堀壁は、削り落されて急峻であるが、石垣が積まれた痕跡はない。下場の堀幅は12mで段堀となっている。南岸には土壘が積まれているが、長さ38mで、高さ2m、上場幅1.2m～2m、下場幅3m。

### (伝) 馬屋敷区域

堀切の南東側に張り出した方形の区画で、「馬屋跡」と呼ばれており、東西22～26m、南北27m。平場は北縁が土壁で、東縁と南縁の東側半分には石垣、西側は土壘が巡っている。南縁の西側半分に土壘は無く開口状態にある。石垣についても、小石が積まれているのは、内側のみである。現況からすると、外側は土壘のままであったとも推定される。石垣は割った小岩を野面積みにしたものである。

平場の西側下には、土壘を伴う長さ15mの空堀がある。上場幅5m、下場幅1.5～2.5mで、北端は館直下の堀切に繋がっている。肩部にあたる堀壁には、石垣が積まれていた痕跡があり、通路として利用されたようである。（平場を貫く道の南側半分は後世に造られたものである）。

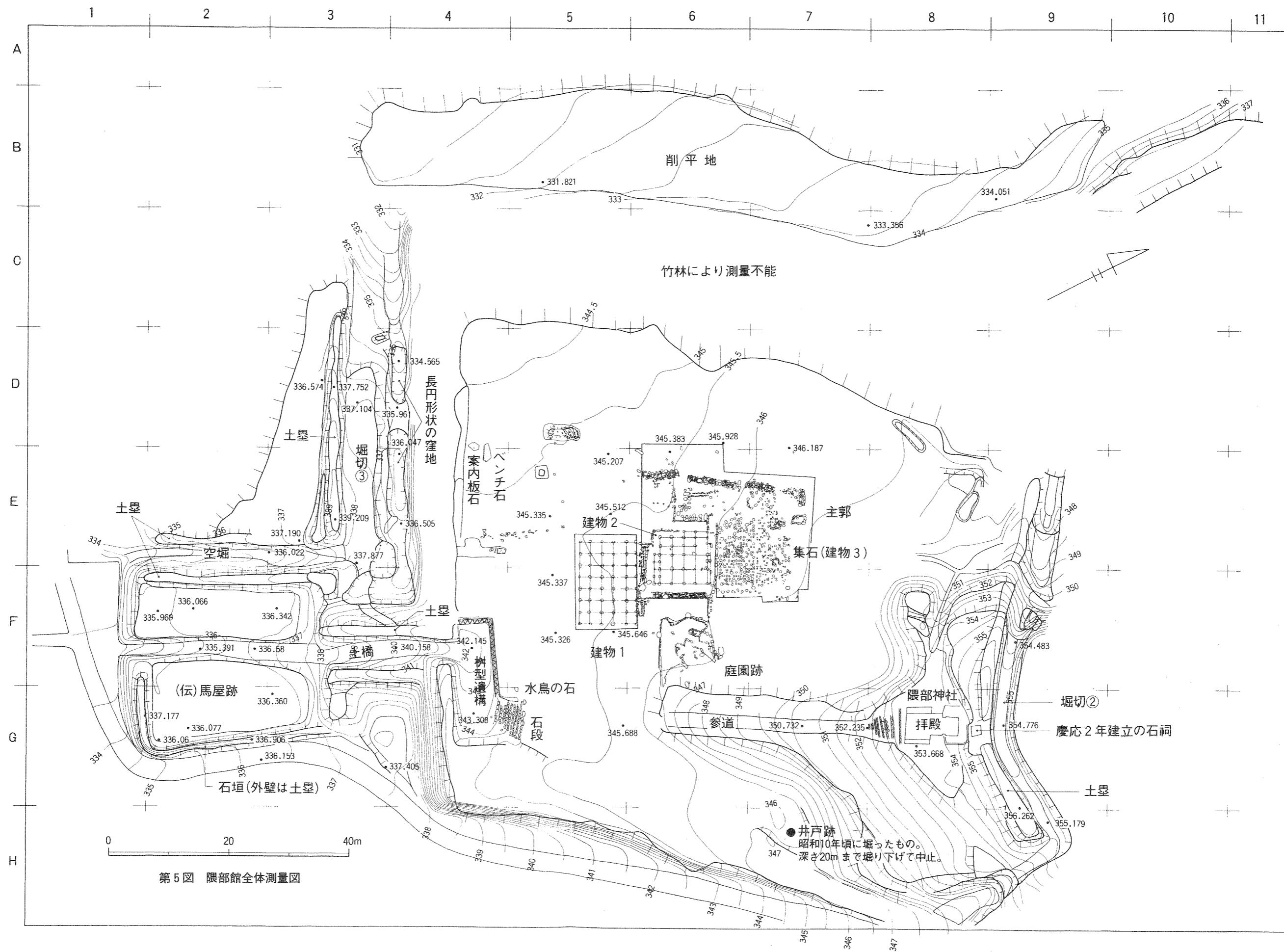
## 登城道と虎口の桟型遺構

馬屋の西側空堀は堀切と繋がっており、右折して少し後戻りすると馬屋跡に入る。ここで現在の登城道と交わるが、かつて、この合流点に7段の石段があった。ここから今の道と重なり、堀切の土橋箇所を渡り切ると石垣を伴う桟型道となる。これを右折すると主郭の広場に入るが、登城道における6箇所の変化点は総て直角をなす。

桟外部分は、東西20m、南北は東側で8.5m、西側で6m、主郭入り口の北東側に9段の石段がある。桟型の石垣の上位部分は近年に修復された。

## [ 小 結 ]

山腹中の館跡で、礎石建物跡と庭園跡及び虎口の桟型遺構などは、高所にあった事が幸いして、極めて良好な状態で残存している。これらの石造り遺構は、一見すれば、近世城跡そのものの感がある。しかし、館跡を含めた隈部氏の持ち城は、天正16年（1588）の「肥後の国衆一揆」の後、すべて廃城になった事は確実である。この意味から、隈部館跡は、肥後における中世最終末の城で、慶長年間からの近世城跡とは、明確に一線を引く事ができる。それにも関わらず、近世城の要素を数多く備えている所に、大きな特色がある。隈部館は、まさに、中世城から近世城に移り変わる最過渡期の館跡である。



# 猿返城跡

## 第1節 遺跡の概要

標高685.82mの山に築かれた砦跡である。城名については『肥後国誌』に見る様に、隈部館と区別できないが、今日、町と地元の上永野地区では、調査区の山を「城床」と称し、「隈部館」と呼び分けている。

地形的には砦跡の山頂と、その山裾に位置する館跡との高低差が340mもあり、台形をした山容は、さらながら隈部館の楯の様相を呈する。登城道は、館の背後から急な北東斜面を登攀する岩場ルートと、館の北縁から東へ2.7km離れた谷部の登城口から、尾根線を直線的に登る2つのルートがある。明らかに、隈部館の背後の守りとなる砦で、山頂から標高619m強までの南側山腹に、砦としての明確な遺構が残っている。

〔岩場ルート〕 館裏の隈部神社から続いている。当初は、谷部づたいの緩やかな山道であるが、途中から岩場の山腹と、尾根筋をよじ登る岩場ルートに一変する。危険が伴う程の急斜面で、登るのにも下るにも困難が伴う。物資の運搬には不適な山道で、主に緊急連絡用に使用されたものと思われる。

〔尾根線ルート〕 林道八方ヶ岳の枝道となる林道横尾線の北側肩部に登城口がある（ここから、逆に谷部を南側へ下れば上畠地区にでる。したがって、眞の意味での登城口は上畠という事になる）。今はヤブの切れ目から、登城道が始まっている。少し歩くと小さな谷川があり、これを跨いだ後は、4m幅の尾根線を直線的に登っていく事になる。北側斜面は絶壁で、麓を流れる谷川のせせらぎの音が心地よい。

15分も登ると、標高513.2mの地点で山腹の切れ目がある。削平地とも受け取れる場所で、この区画については後述する。その西端を通って行くが、山道に並んだ2つの巨石が目に留まる。地形的にも、この箇所に堀切が埋没している可能性があり、巨石は、その両肩部に座っている様にも見える。

これから山道は、つづら折りになり、ほどなくして猿返城跡と米の山城跡を結ぶ山道に上がる。統いて、この先の二俣道を左に折れて、急な山腹を登りきると猿返城跡の山頂となる。登城口からの山道は、全体的に傾斜が急で、登るのに楽でないが、しっかりとした山道が確保されており、物資の運搬が可能である。登城口から山頂までの所要時間は約45分を要する。

## 第2節 遺構について

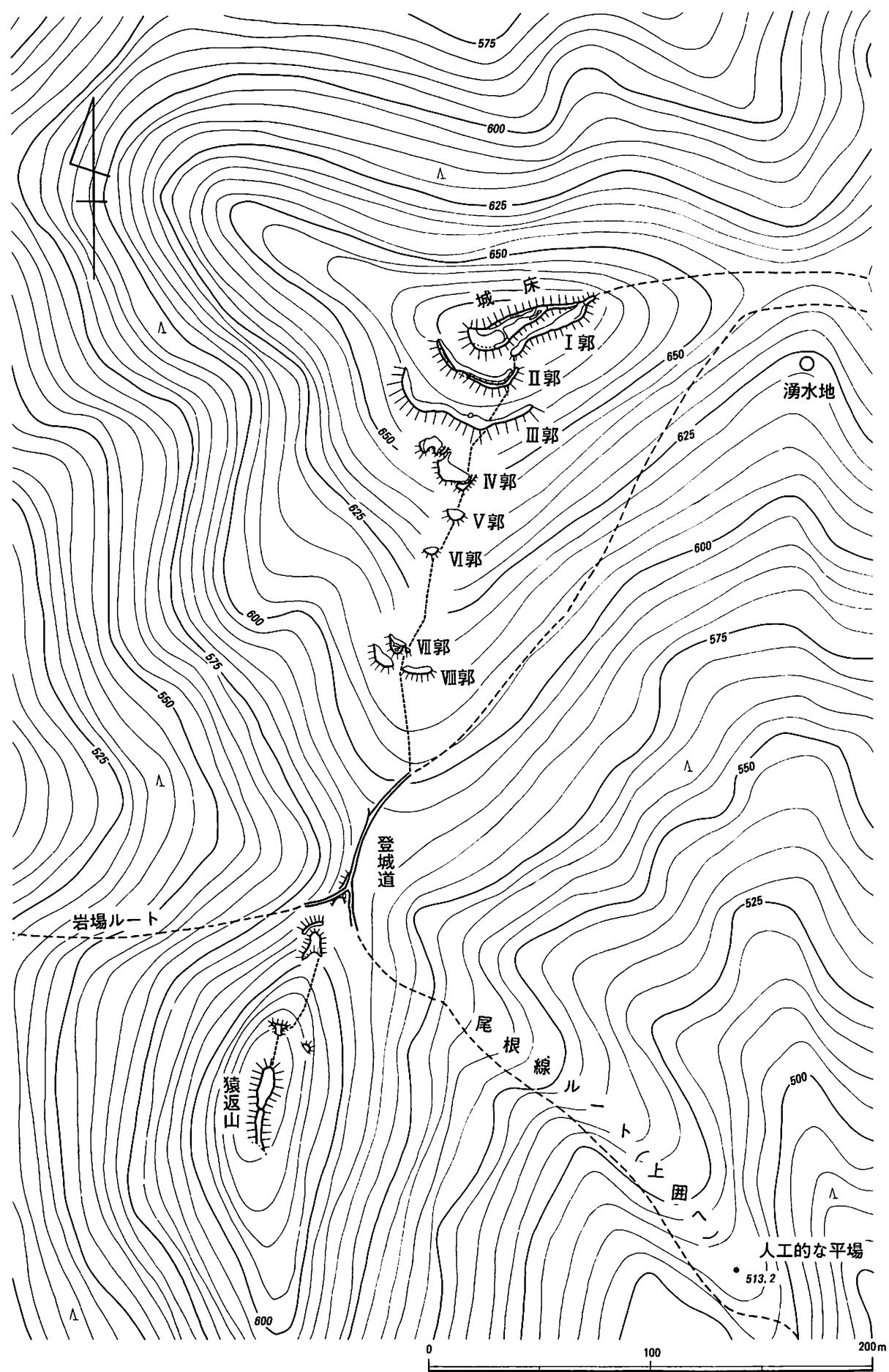
### 山頂

標高685.8mで、最高所は土壘の上域面にある。山頂部分には、2段に分かれた平場があり、北縁に大土壘が積まれている。南縁にも比較して、やや小規模の土壘が積まれた痕跡がある。北縁下は、高さ240m近くに及ぶ絶壁となっており、足がすくむ。非常に風の強いところで、春先に深谷から吹き上げる強風は、台風並みの勢力がある。岩場にひっかかっていた測量時の切り枝が、強風で山頂まで吹き上げられて、頭上を飛んだ時は、肝を冷した。

### I 郭

帯状の平場で、主軸の向きは東西方向にあるが、東側に鞍部を有するため、西側に広く、東側ですばまっている。長径37.5m、短径は西端で11.5m、東端で4mに括れ、西端部から東側へ13.5mの所で、0.8m強の段上がりになっている。

〔I郭-1〕 段下がりの平場であるが、完全な平坦地ではなく、西端部では、南側から東側への緩やかな傾斜地（比高差0.8m）になっている。東端の幅は5.5mで、北西隅に三角点（682.4m）がある。場所的にも砦



第6図 猿返城跡周辺地形図

跡の中心をなす区画であるが、単なる「物見の場」の様な感じがする。常設の見張り小屋の類が存在したようには思えないし、烽の痕も確認できない。唯一、見晴らしの良いのが、最大の利点である。

〔I郭-2〕 段上がりの平場で、中央部の幅は3.5~4.0m。東西両端の高低差はないが、南北幅では、東側寄りで中央部がやや窪む(比高差0.1m強)。見方によっては、東西方向に延びる小土壘と小空堀が組み合わさったものが崩壊した様にも思える。これが烽の痕であろうか。

〔土 壁〕 長さ33mの大土壘で、最高所は標高685.82mを示す。構造的には、地山の削り残し部分に掘削土を積み上げて高くしたものであろう。構造的には、米の山城跡の山頂に築かれた土壘と同一の造りである。長さ21.5m、最大幅2m。高さは最高所で1.3m強。上面は一様な高さでなく、中央部分(長さ6m)から東西両側への緩傾斜地になっている(比高差は東側で0.5m強、西側で1.6m強)。東端部は、瘦せ馬の背のような地形となり、鞍部側へ下っているが、ほどなく急な岩場に吸収されている。土壘の存在理由の一つには、風避けが考えられる。もし、土壘がなかったら、強風時には山頂に立つ事さえ困難であるし、臨時の見張り小屋が必要な場合でも、谷部から吹き上げる強風で一溜りもないであろう。この事は調査者の実感である。

〔I郭-3〕 I郭-2の南側5m真下に、長さ40m、幅1~5mの削平地がある。東端部はI郭-2と同地形で、南縁部が土壘状にやや高くなっている(高さ10cm程度)。山頂下に残る削平地としては、方向から例外的な位置にある。ちなみに他の遺構は、総て南北方向に下る尾根の山腹・登城道沿いに残っている。その意味で、I郭-1・I郭-2の補充的な削平地と考えられる。

## II 郭

標高676mラインに残る弧状の平場である。凸面は南西側に張り出しており、東西両側が、すぼまっている。両端の直線の長さは37.5mで、この線を元にした凸面中央部までの張り出し幅は8.5m。平場箇所の南北幅は4~5mで、南縁に土壘が積まれているが、中央部に崩壊箇所がある。長径方向における高低差は、ほとんどない。

遺構の残存状況から、II郭には土壘を伴う濠が掘られていた事がわかる。現況の計測値は、埋め土の平場部分が2~3m幅で、土壘の上面幅は1.5m。特に、旧地形がはっきりしているのは南東側で、土壘の高さは0.5m弱に及ぶ。散兵線的な残濠と土壘であるが、この様な高所に、かかる防御施設を設置して、いかなる効果があるのだろうか。大いに疑問である。さらに、この濠は意図的に埋められた感じがする。今後、猿返城跡を含めた中世城の破城についても検討すべきであろう。

## III 郭

標高665mラインに残る弧状の平場で、現況は、II郭と同じ向きにあり、同一の形状をしている。但し、規模は、はるかに大きく、両端の直線の長さは60.0mで、凸面中央部までの張り出し幅は12.5m。平場の南北幅は大方、3.0~5.5mであるが、東側寄りで、1.0~2.5m幅に狭まる。但し、いずれの箇所も南縁に土壘状の高まりではなく、単なる平場の感じがする。これについては、破城の際に、土壘が取り壊された可能性もある。長径方向における高低差は、ほとんどない。中央部寄りの東側では、動かす事ができない巨岩が座っている。山頂域の平場から見れば、腰曲輪の様な遺構である。

## IV 郭

標高653mと654mラインに残る段違いの平場である。西側は、一段高くなっているが、地すべりで生じた段差とも思われる。

〔IV郭ー1〕 標高653mラインにあり、東西の長さ15m、南北の幅は最大で8.0m。東縁は土壘状に一段高くなっている。高さは0.2m強で、南端の上面幅は4.0m。

〔IV郭ー2〕 IV郭ー1の西側にあって1.0m程高い。東縁は、同じく土壘状に高くなっているが、人工的なものか不明である。高さ0.5m強で、山腹から張り出す格好をしている。平場の中央部は、やや凹面状態になっている。東西の長さは10m、南北幅は5.0m。西縁も東縁と同様に、0.4mほど高くなっている。

## V 郭

標高646mラインに残る隅丸三角形の小平場である。尾根筋の北側から斜面側の南側に向かっての緩傾斜地となっているが、明かに人工的な地形である。東西の長さは8.0m、南北幅は5.5m。

## VI 郭

V郭と同じ造りの平場で、標高637mラインに残っている。平坦地で、東西の長さは6.5m、南北の幅は、3.0m。造りは極めて小規模で、この平場がいかなる意味を持つのか、考えようがない。

## VII 郭

標高622mラインに残る小平場である。東西8.0m、南北幅2.0mの半月状の平場があり、南縁は一段、高くなっている。ちなみに、この箇所には、北縁が土壘状になっており、南側に円形状の僅かな凹地がある。見方によっては、烽場とも受け取れるが、山腹に位置しているので疑問が残る。

## VIII 郭

標高619mラインに残る小平場である。東西2つの区画に分かれているが、高低差は、ほとんどない。山頂直下の山腹に残る遺構は、これを最後とする。

〔VIII郭ー1〕 東側の区画で、東西の長さは13.5m、南北幅は3.0m弱。

〔VIII郭ー2〕 西側の区画で、東西の長さは12.5m、南北幅は5.0m弱。

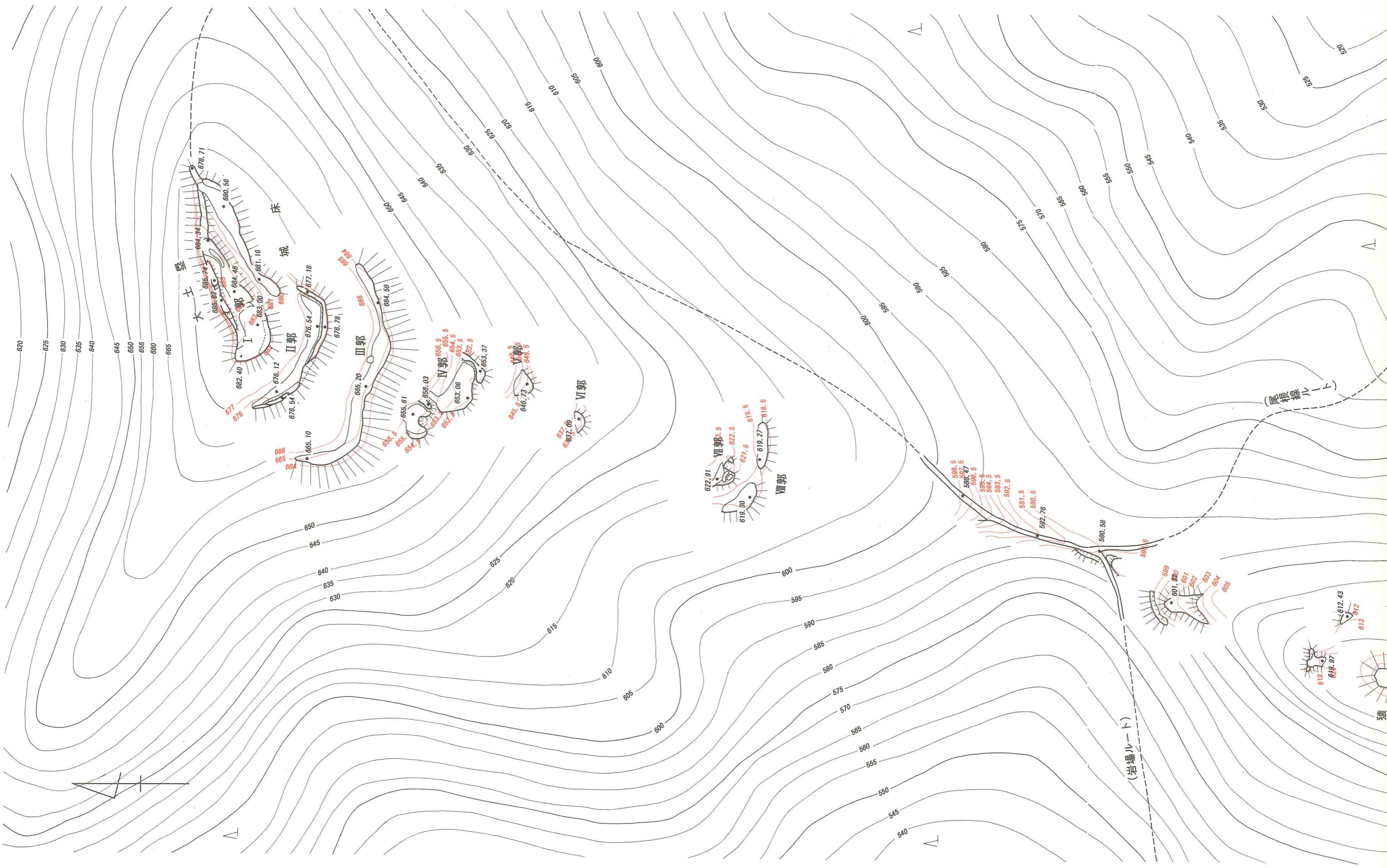
## 人工的な平場

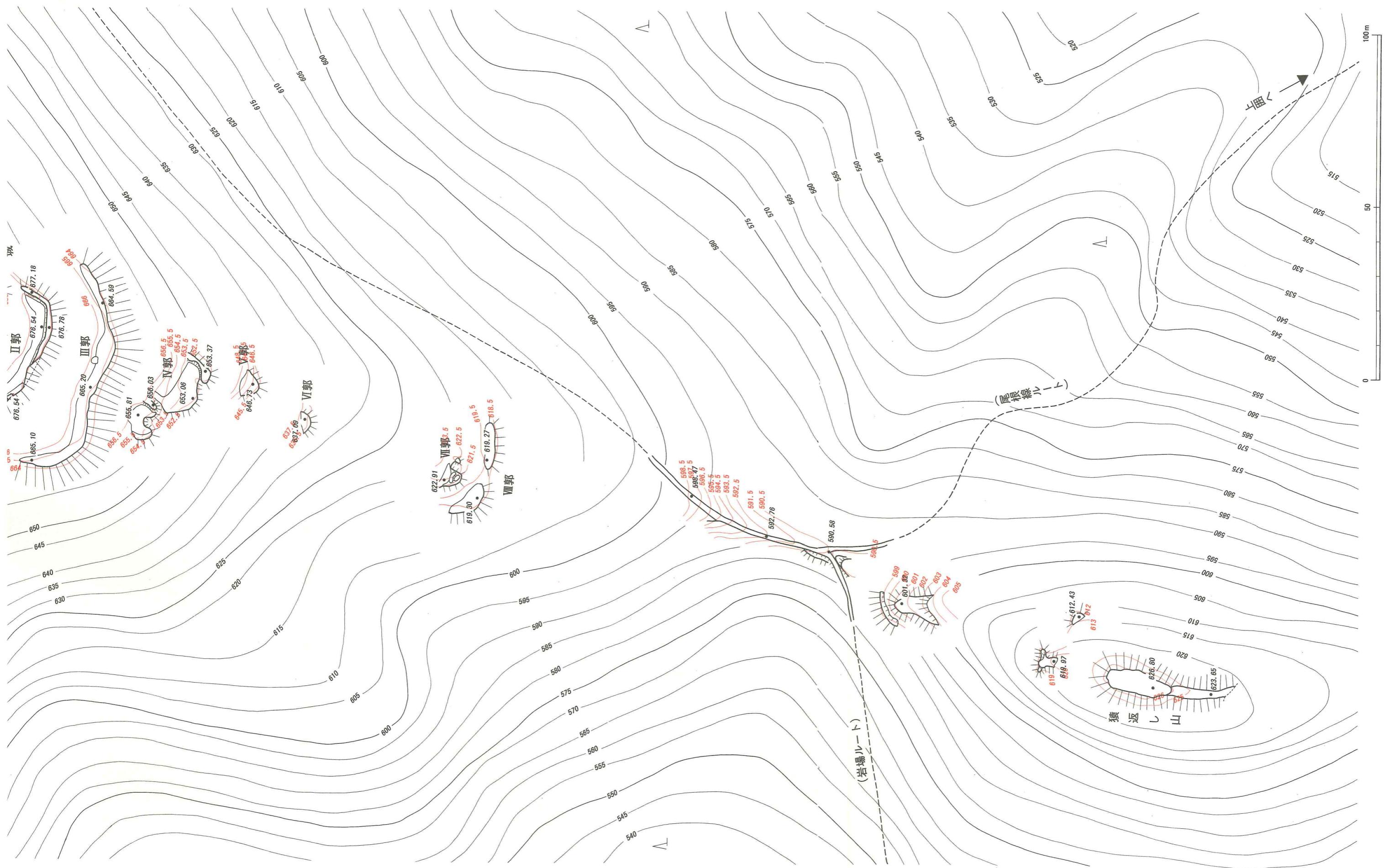
前述したが、上図の登城口から15分ほど登った標高513.2m地点に、人工的な平場がある。山付き側の山腹は削り落されており、東西の長さ27m、南北幅9.5mの平場である。ただし、全体的に北側から南側への緩傾斜地である。西端を登城道が通っている。II～VII郭とは性格の違う平場で、面積の広さから兵站的な役目を荷負っていた中継基地の可能性がある。

## 登城道

登城道では、標高590mラインの鞍部に残る長さ45m、2m幅の山道が注目される。痩せ馬の背の様な尾根筋を、斜面両側から、さらに削り落したもので、一見すれば古代山城の土壘線そのものである。

この箇所に、先に述べた2ルート（岩場ルート・尾根筋ルート）の登城道が合流しており、猿返城跡と米の山城跡へ通じる分岐点もある。猿返城跡へは、この道から西にそれで、急な山腹を上って行くことになる。一方、米の山城跡へは、これから尾根筋沿いの道を1時間30分ほど進む必要がある。なお、米の山城跡への道は、尾根筋の南側斜面を走行しているが、城跡近くでは上面域を通過している。斜面部では1.5m幅の開削道が造られており、今も良好な状態で山中に残っている。





第7図 猿返城跡全体測量図

## 水 源

猿返城跡の山頂から東北側に、岩場の斜面を85m近く下ると、尾根筋の鞍部がある。ここも痩せ馬の背のように括れており（長さ14m、幅2m）、南側の真下（2～3m下）には、猿返城跡と米の山城跡を結ぶ山道が通っている。驚くべき事に、この鞍部の南下斜面部に湧水地がある。山道から55m（斜距離）ほど下った谷部の岩場がそれで、食用蛙の鳴き声に似た音を立てながら、水が湧き出ている。長さ4.5mの岩場に三か所の窪地があり、真中の1m幅のものが最も活動している。その窪みには、直径11～15cm大の丸い穴が横並びにあり、時間をおきながら自噴している。雨上がりには、この区域に長さ5m、幅2mの浅い池が出現する。はつきりとした水汲み道も残っている。（中満氏の示唆によれば、これより50m下った山腹にも水の湧き出す岩場があるという）

## 猿返し山

調査スタッフの一員である地元の丸山敏郎氏と勢田高司氏から「城床の真南に猿返し山と呼ばれる山頂があり、ここも調査したらどうでしょうか」との勧めがあった。

猿返城跡の山頂から約300m下ったところに尾根筋の鞍部がある。ここは、先に述べた登城道の一部で、この道の南端も北端と同様に、東西二股に分かれている。これらの道は、説明済みの岩場のルートと尾根線ルートであるが、これら分岐点となっているのが猿返し山である。標高626.8mで、山頂には水準点がある。しかし、まったくの自然地形の岩場である。これより南側へは痩せ馬スタイルの尾根筋が緩やかに下っている。一方、鞍部の北側は急な傾斜となっているが、途中に平坦面を有する岩場や、小規模の平地がある。

概して、人の手が加わった砦跡という感じはしないが、自然地形を猿返城の防衛網に組み込んだ可能性はある。山容は小碗の様で、遠目にも良く目立つ。山頂の西縁からは、隈部館の全容が俯観できる。さらに、猿返城の南西斜面に残る削平地を身近に一望する事ができる。最近まで、山頂には鳥居があったという。隈部館跡に繁茂している山ツツジが、ここでも見られる。自然地形を利用した物見の山と考えられる。

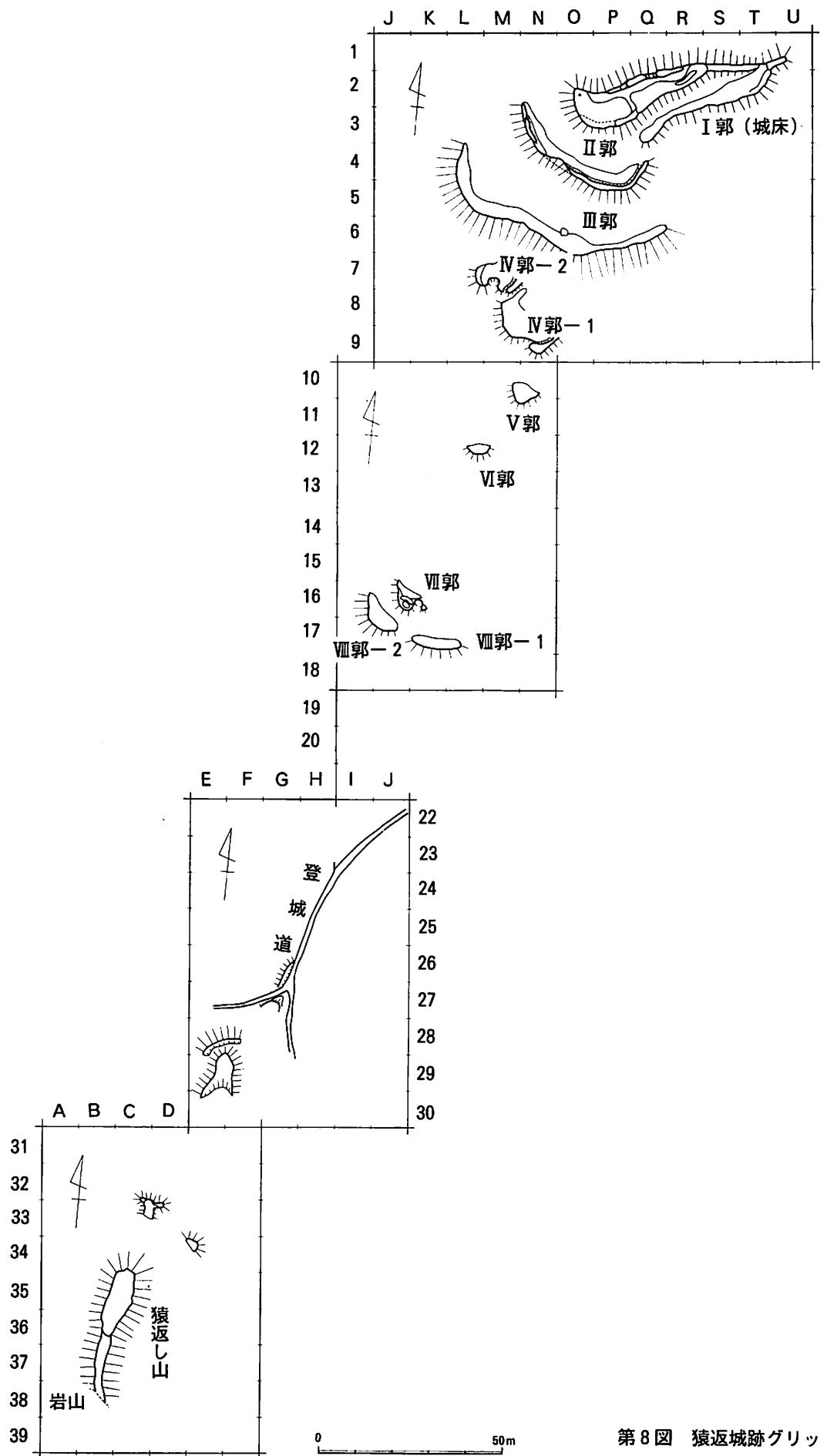
## 〔 小 結 〕

(1) 測量の結果、山頂下の南西側山腹には、7箇所の削平地(Ⅱ郭～Ⅳ郭)が存在することが判明した。特にⅡ郭については、南縁に土壘が残っており、濠が埋没している事がわかる。

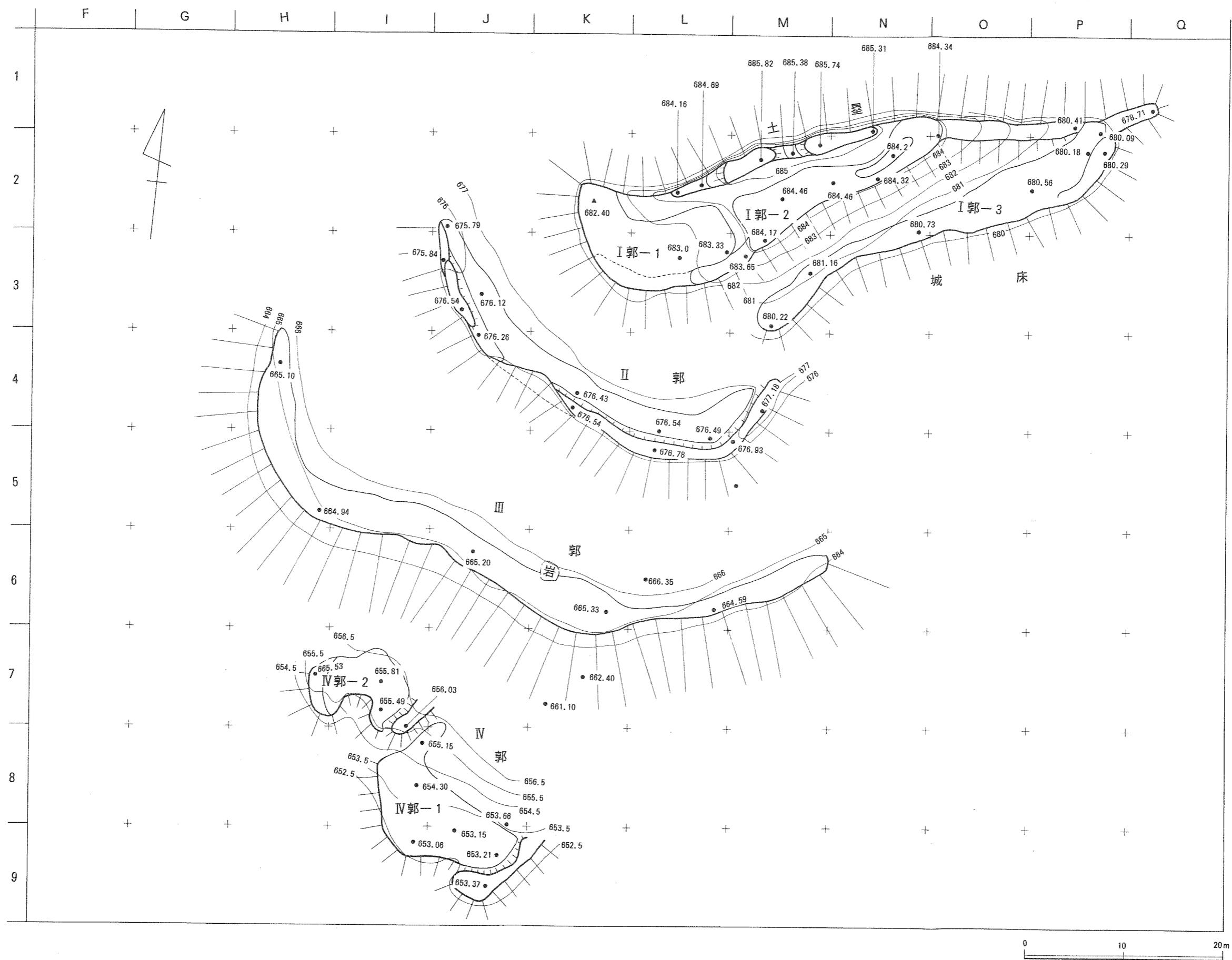
これらの削平地の事を『肥後國山鹿郡村誌』は「堅堀七行アリ長三十間甚不深其下断岸」と表現しており、『山鹿郡中村郷地誌調』は「切岸ノ上ニ堅堀七筋アリ長三十間計深二尺ハカリニシテ広カラス」と記しているのが興味深い。両書とも記述者は、削平地の遺構を堅堀と解釈していることがわかる。

ちなみに、記述者は、実際に現地を踏査している事になる。よくぞ、この山腹の削平地を城跡の遺構として認識できたものと驚くしだいである。当時も、かなりの雑木が繁茂していたものと思われる。先学者の卓見に脱帽する。

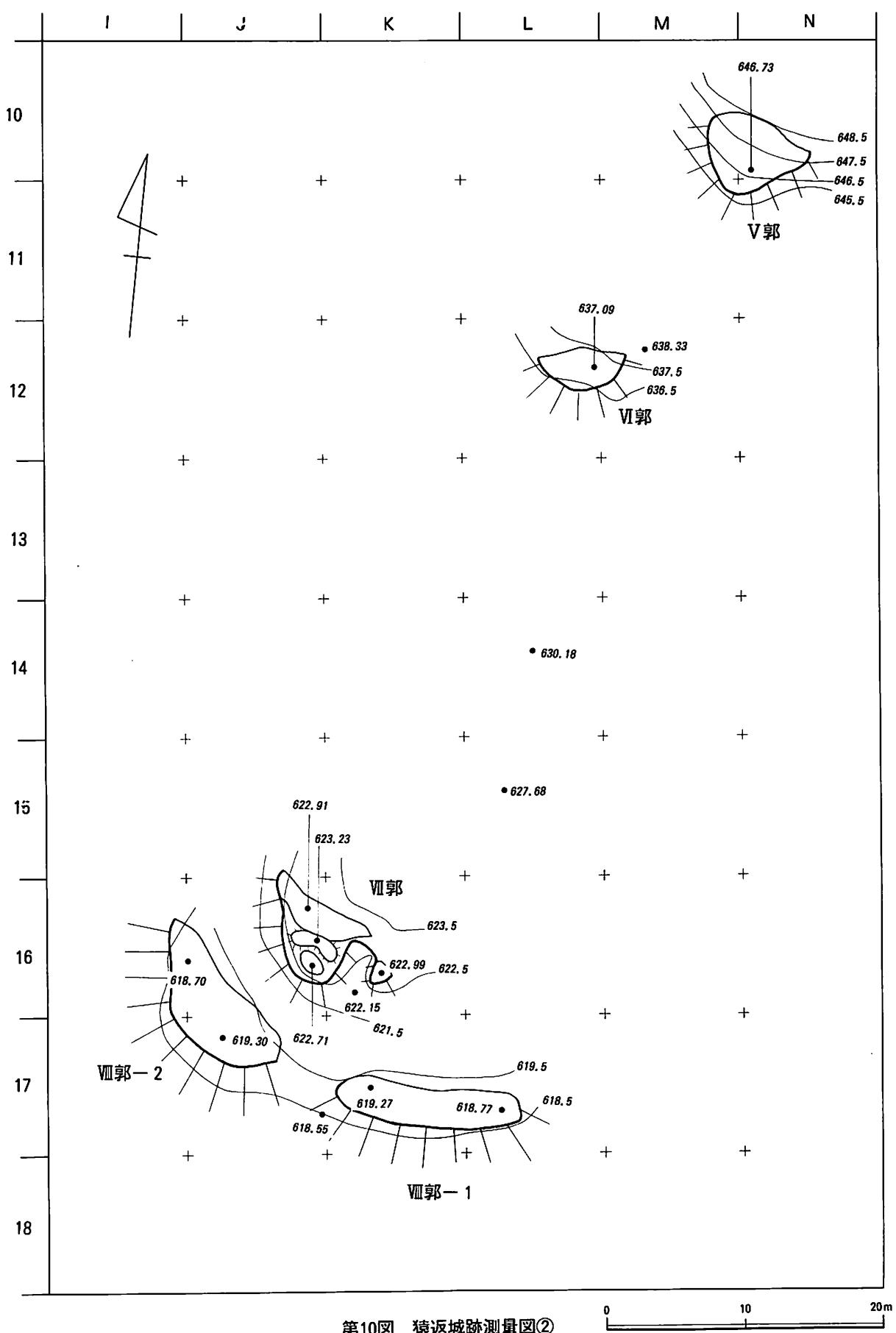
(2) 猿返城跡は、山頂域を中心として、隈部館側の山腹に削平地を配した砦跡である。非常時には、各段ごとに、守備兵が配されたものと思われる。猿返山は、尾根筋の頂きを物見に利用したものであるが、隈部館をより身近に望める場所として重要である。これらは高所である所から、敵方の動きを一望のもとに監視する事ができるし、立て籠もりや、逃げ込みの場として活用する事ができる。館の後方から食料や水、武器、兵士を送りこむ事も可能である。しかし、万一、この様な場所を、敵から乗っ取られれば、致命傷になりかねないことは、明らかである。隈部氏にとっては、死守すべき場所で、おのずと砦が築かれた理由がわかる。



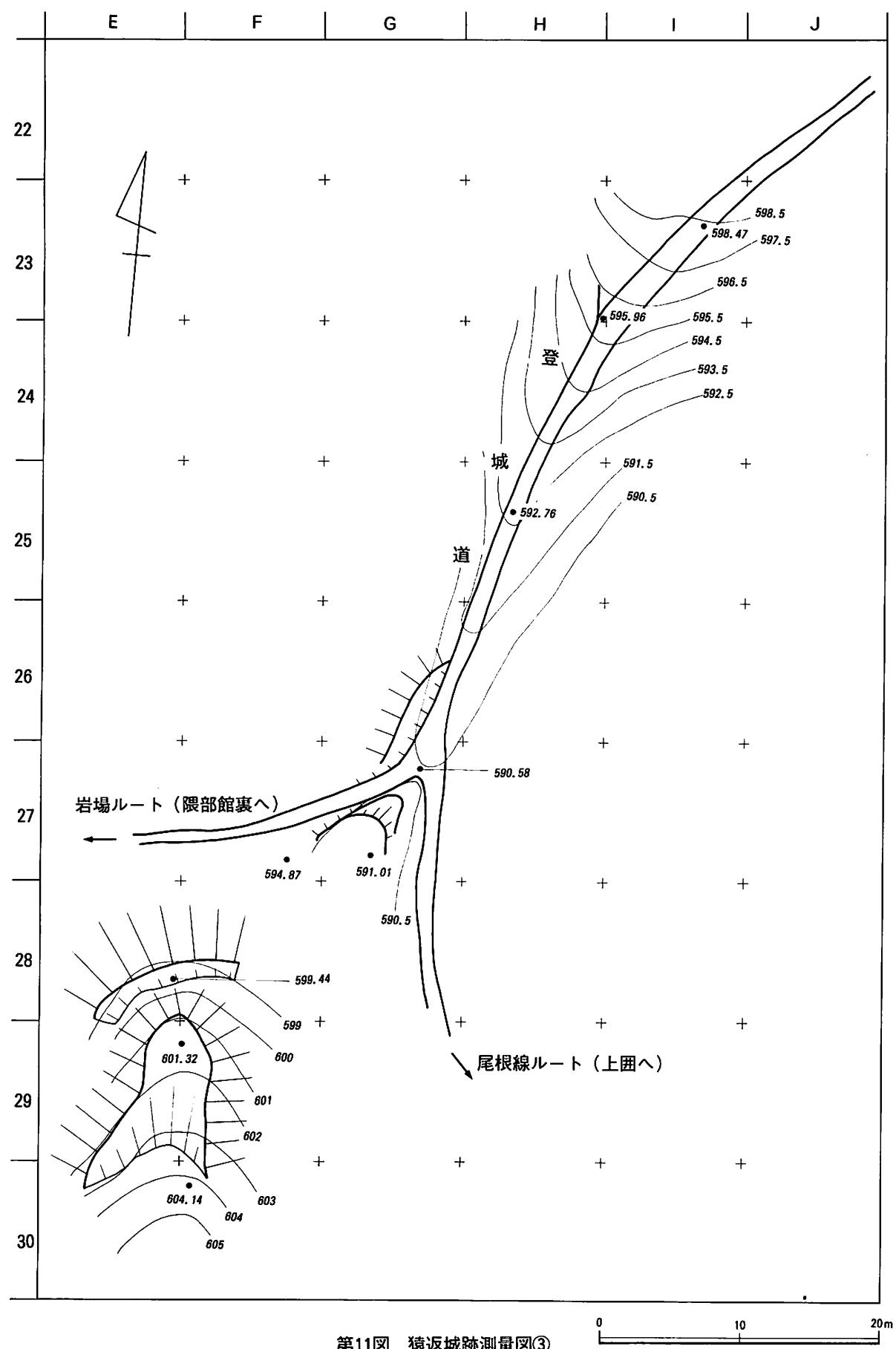
第8図 猿返城跡グリッド設定図



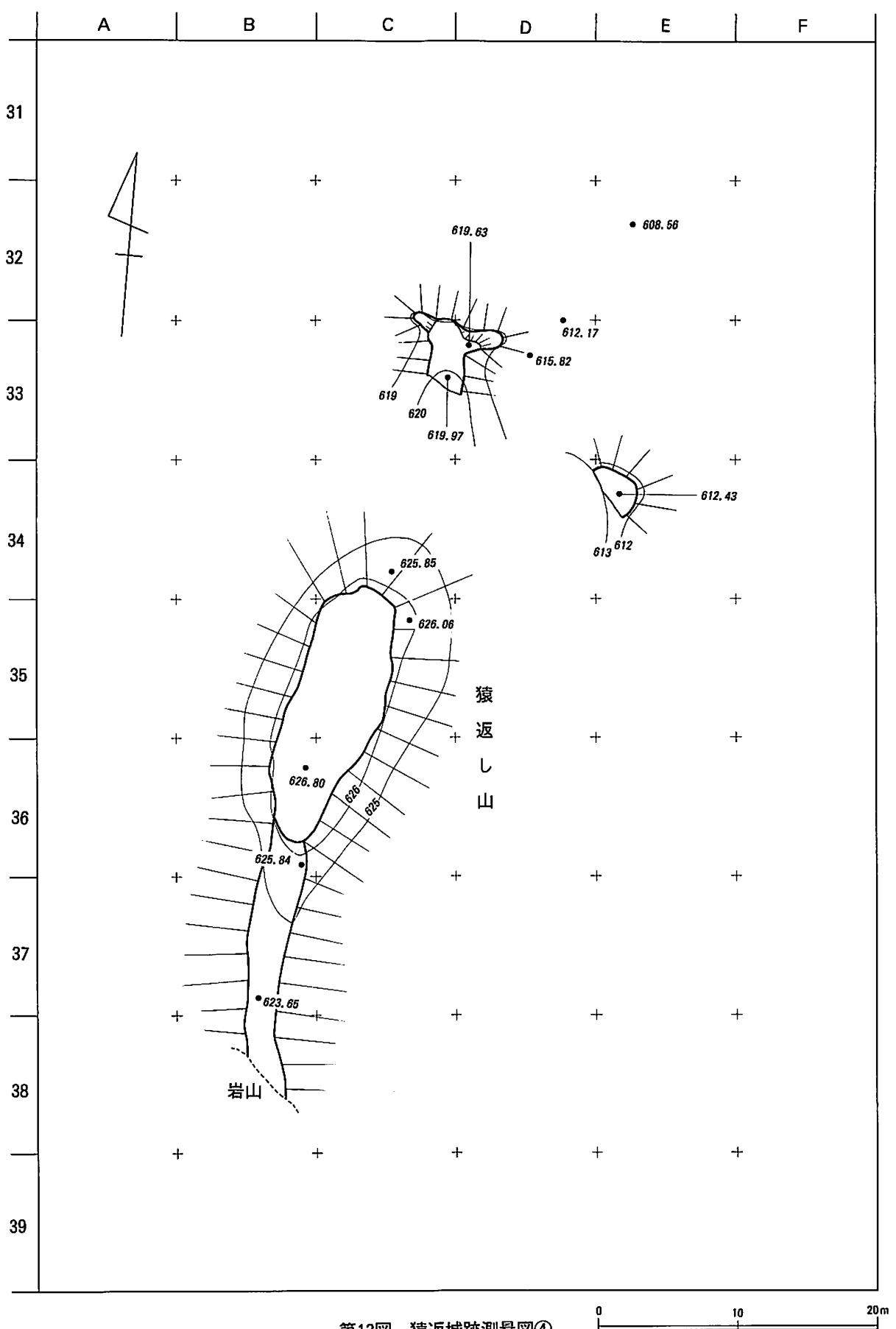
第9図 猿返城跡測量図①



第10図 猿返城跡測量図②



第11図 猿返城跡測量図③



第12図 猿返城跡測量図④

0 10 20m

# こめ 米 の 山 城 跡

## 第1節 遺跡の概要

標高758.4mの高山に築かれた砦跡で、猿返城跡と同じ系列の尾根筋にある。両城跡は、地図上での直線距離で1.3km離れており、尾根づたいの山道の実距離は4kmを越えている。

登城道は、猿返城跡経由の尾根線ルートと、隈部館跡から東側へ2.7km離れた谷部からのルートがある。

(中満氏の示唆によれば、これとは別に、米の山城跡から西南側へ下る山道もあるという)

林道横尾線の終点に登城口があるが、これは、八方ヶ岳の登山口でもある。山道を進むと、程無くして谷川を横切り、15分程で大岩箇所に到る。さらに山道を登っていくと、20分ほどで登山道の分岐点がある。直進すると、八方ヶ岳へ至り、西側に折れれば、猿返城跡への登城道となる。これから、つづら折りの道を登っていくと、40分程で山頂に着く。総じて、尾根筋を直線的に登る猿返城跡と比較した場合、楽な感じがする。

山頂を中心に、南側山腹と、南西側及び北西側の尾根筋に砦としての遺構が残っている。城域は松の植林地である。

## 第2節 遺構について

### 山頂

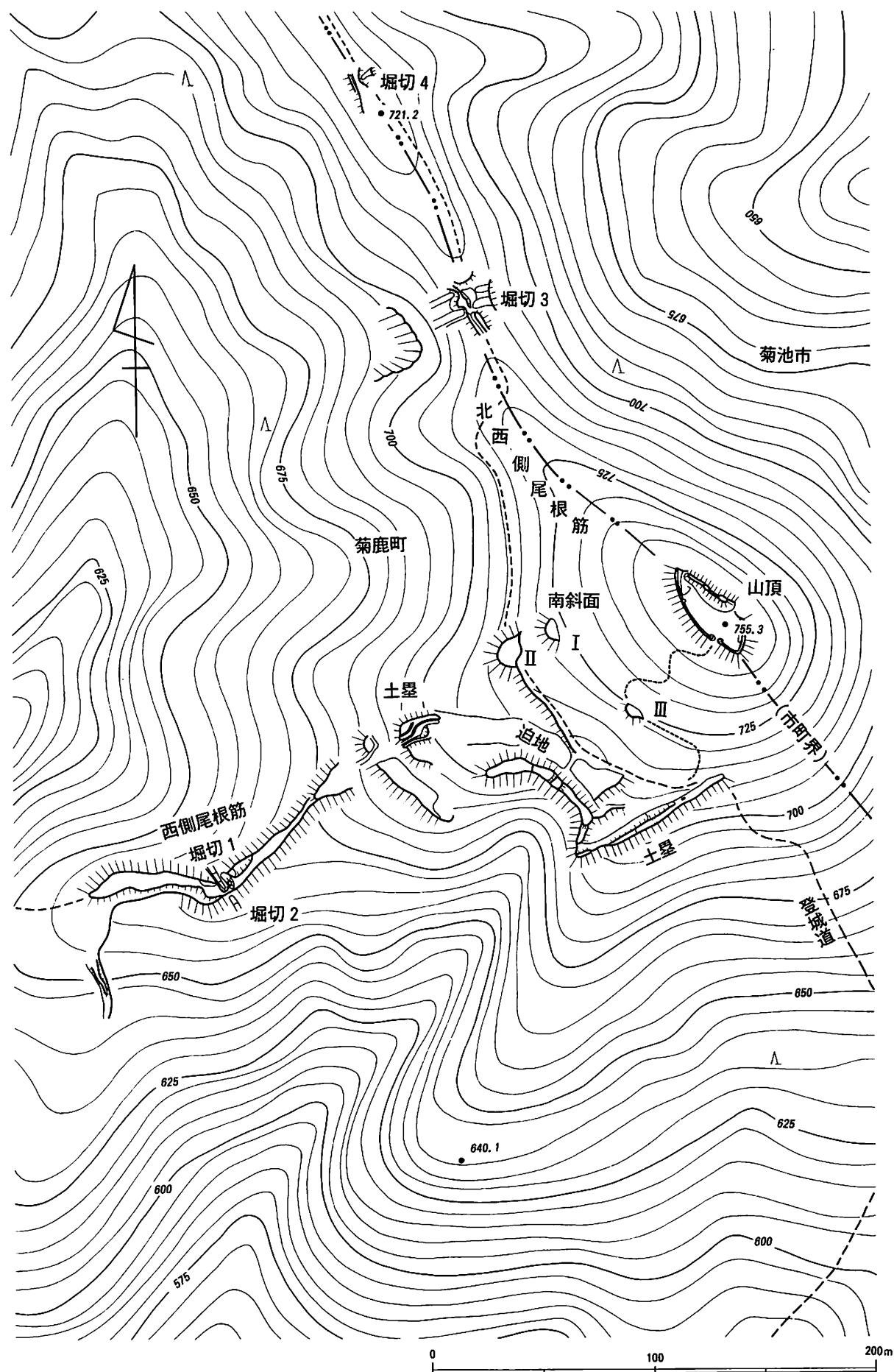
49m×21mの長円形をした平場がある。長軸は南北方向にあり、北縁に高さ3.8m弱の大規模造りの土壘がある。土壘の形状は、猿返城跡の山頂のものに良く似ているが、一回り大きく、高台の様な感じがする。山頂の旧地形は、全体的に北側から南側への緩傾斜地であったらしく、これを大幅に削って平場が確保されている。土壘は削り残した地山に堆土を高く積み上げたものである。土壘の北側は、垂直に近く、そのまま山頂北斜面の絶壁に繋がっている。平場の縁部には、この土壘以外に、高さ0.2mの小土壘が、ぐるりと巡っている。なお、広場の中央部には長さ1.3m、幅1.2m、厚さ50cmの大岩が座っている。

山頂からは、南方向に菊鹿町全体を一望する事ができる。一方、北方向には、八方ヶ岳の山頂と南側山腹を間近に望める。東西両方向は、尾根筋が延びており、特に東方向には、虎口城跡と伝えられる山頂と菊池の北部山間地域が遠望される。山頂の平場は、物見に利用されたと思われるが、非常な高所にあるため、監視場としては、かえって不便であった様な気がするが、いかがなものであろうか。

猿返城跡からは、米の山城跡の尾根筋に遮られて、菊池の北部山間地域は望めないので、米の山城跡は、その方面的眺望をカバーしている事になる。さらに、その東側にある虎口城跡からは、より正確な情報が得られる事になる。伝達ルートは、虎口城—米の山城—猿返城—隈部館の順となる。手段としては、烽をあげたり、伝令が山道を走ったものと思われるが、かなりの困難が伴ったと思われる。

〔大土壘〕 全体の長さは27mで、裾部までの幅は7m、北側は直の状態で、そのまま絶壁に吸収されている。土壘は、南側で膨らみを持つ。上場の長さは21mで、幅は1.0~1.5m。東側から西側に緩傾斜しているが、2箇所に高まりがある。最高所は標高759.40mで、この部分と平場の比高差は3.8m弱。一見すれば、土壘の様な感じがする。この土壘も風避けのために造られた感じがする。第一、位置的に菊鹿町と反対の北側に積まれており、非常な高所であるため、目隠し的な土壘は不要である。

〔小土壘〕 平場の縁をぐるりと巡っている。高さは0.2m前後で、後世の単なる土盛りの様に思えるが、基底部には石列があり、明らかに遺構である。石列は、自然石が一石づつ並んでいる。大きさは、一例をあげると、長さ1.4m、幅0.75m、厚さ20cm。神籠石の様な感じのする石列であるが、西側寄りでは、偏平石も使わ



第13図 米の山城跡周辺地形図

れている。

南東側に小土壘の途切れる箇所がある。ここは虎口で、開口の両端は一段高くなっている（西側で45cm、東側で30cm）。門礎石とも思える石も残っている。ここから南側斜面を下る登城道は、上位部分が崩壊している。

小土壘の西端部は、大土壘との間が3mほど開いている。これについては、平場の西端部寄りが溝状に、やや窪んでいるのと関連があろう。雨天時の際の水抜き溝と思われる。

#### 山頂南斜面

標高723mラインと標高716mラインに舌状形をした3か所の平場が残っている。Iは、標高723mラインにあり、長径10m、短径6m、この真下に、長径15m、短径11mのIIがある。IIIは、長径10m、短径4.5mで、標高723mラインにあり、Iから東側へ22m離れたところにある。登城道に関連した平場と考えられる。

#### 山頂南斜面下の区域

麓から登ってくると、山頂に至る前に、標高704mラインで山腹の切れ目がある。地形的には、尾根筋の張り出し部分で、標高709mラインに小規模の鞍部があり、これを境にして東西両側に平場的な区域が形成されている。地表面は、東西両側の長軸方向で、迫地の様に若干、窪んでいるが、底部面積は広く、建物等を建てるとしても、十分な広さがある。

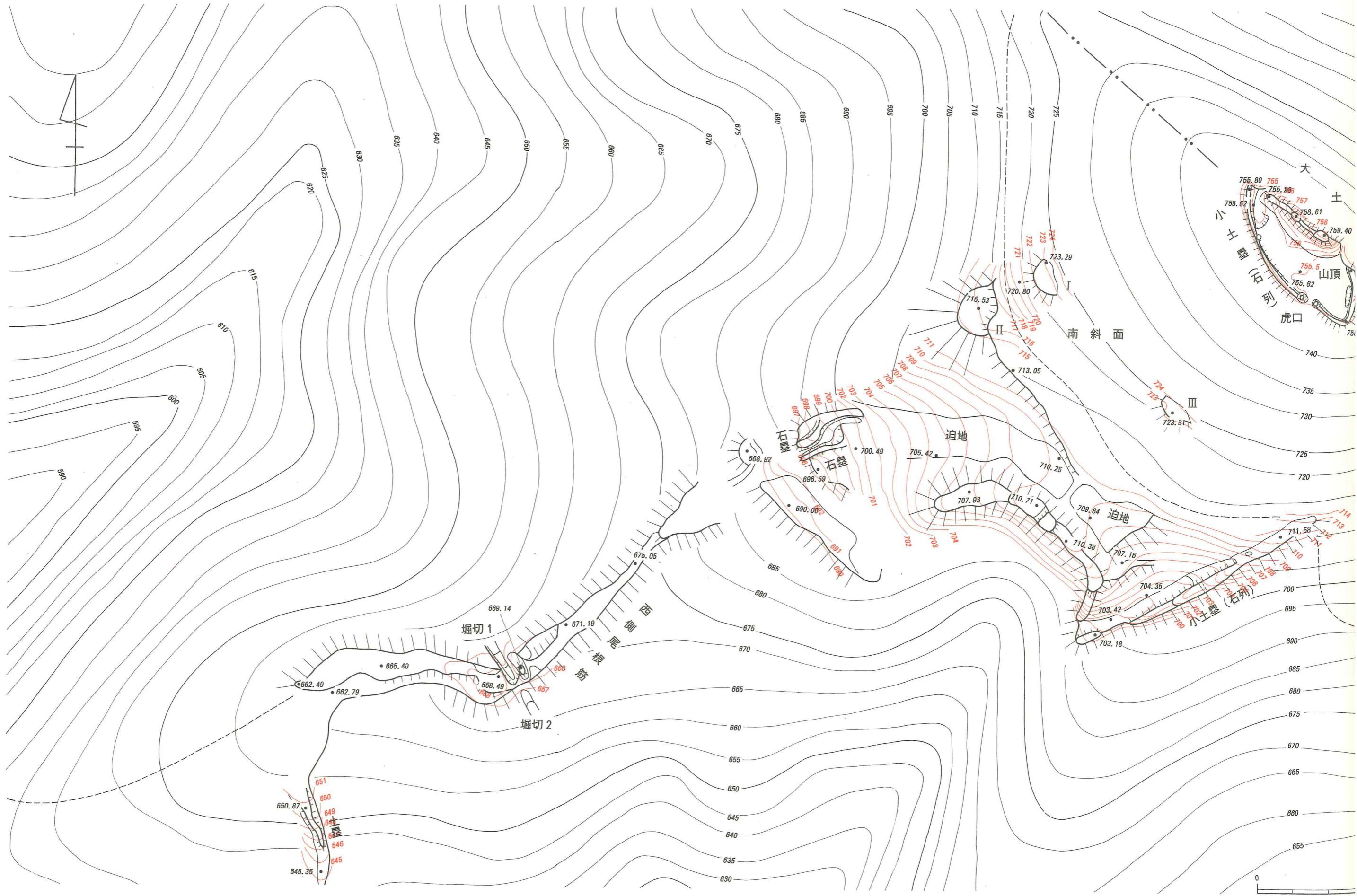
〔登城道の土壘と石列〕 区域の東辺に残っている。標高700mから標高714mにかけて、山頂に通じる登城道と、その肩部に積まれた小土壘と石列が残っている。道の長さは76mで、南西側から北東側に登っており、道幅4m。土壘は高さ30cm、上面幅3m、低平であるが、最下部から上部にかけて、長さ50mの範囲で確認できる。石列は、土壘の内側と斜面部にある。山頂部の石列と同じもので、凝灰岩の自然石である。大石が土壘の基底部に並んでいる。

〔南辺の小山〕 自然地形であるが、区域の南辺は、小山状に高くなっている。形状は山腹側に向かって、凹面の状態にあり、東西両端部での直線距離は53m、幅にして、14m分が内側にへこんでいる。上面は、最高所が標高710.71mで、長径15m、短径3~5mの平場がある。ただし、一様に平らではなく、東側寄りで4.5m分が、やや高い。斜面部に削り落としの痕はない。

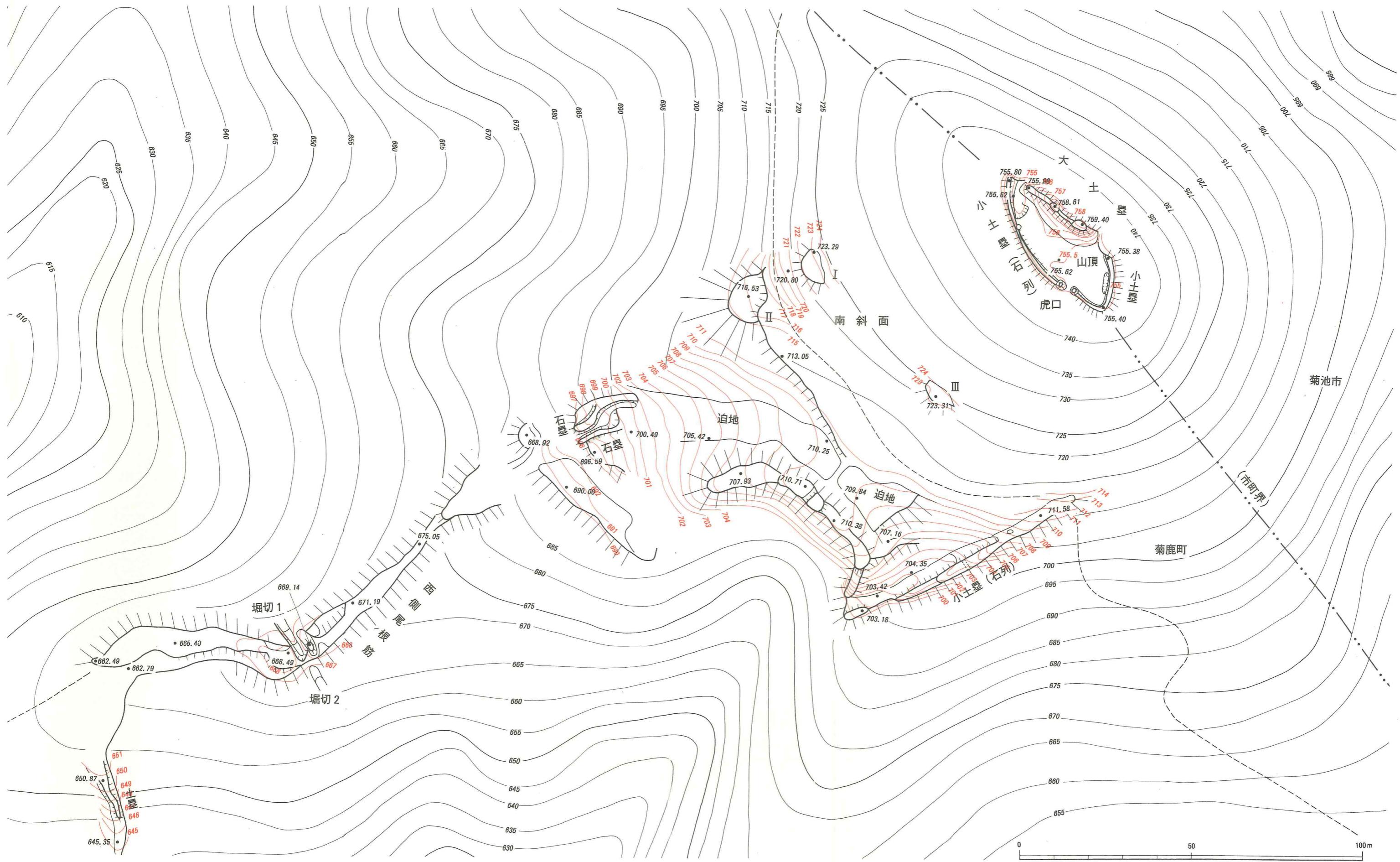
〔小規模鞍部の迫地〕 東側は、標高710mラインから標高708mラインにかけて、長さ19m、西側幅6m、東側幅17mの範囲が一つの区域を形成している。西側から東側への緩傾斜地であるが、東端部に整形の痕が伺われる。西側は、標高710mラインから704mラインにかけて、東側から西側への傾斜地となっている。長さは直線距離で60m、南北幅は上位で8m、下部で13m。自然地形のように思えるが、地表面には建物礎石らしき凝灰岩の割り石が点々と顔を覗かせており、肩部には、石壁とも受け取れる石礫の並びがある。

〔迫地の西端部〕 標高702mから標高698mにかけて、溜池状の凹地と土壘に伴う石壘が残っている。遺構全体が、上部の迫地に繋がる登城道の一部とも受け取れるし、石壘は城門のようにも思え、はつきりしない。溜池状の凹地は、5m四方の大きさで、中央部が丸く膨らんでおり、深さは1.9m。上部は溝状に変化しており、幅2m、長さ8m分が残存する。下部も上部と同じ形状であるが、両肩部は土壘となって、大石が野面積みされている。南側の土壘は、長さ14m、高さ2.28m、上面幅1m強。壁面の石壘は3段積みで、高さ0.9m。北側の土壘は、長さ9mで、上面は1~2m。

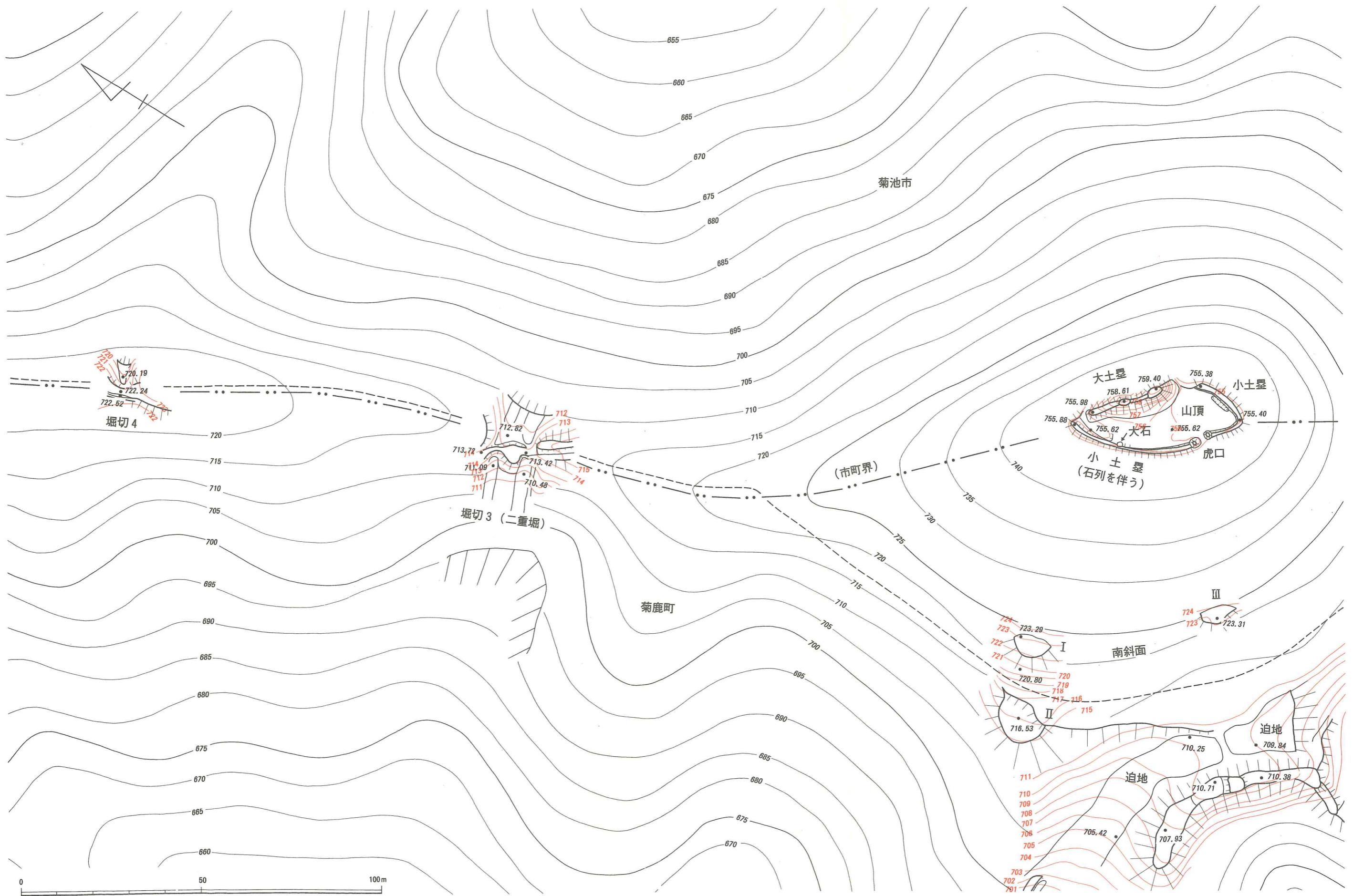
〔迫地の西下の区画〕 東側から西側への緩傾斜地であるが、標高692mから標高689mの斜面部に、やや平場的な箇所がある。長さ32m、幅7~9mで、長径の向きは、斜面部に沿ってある。



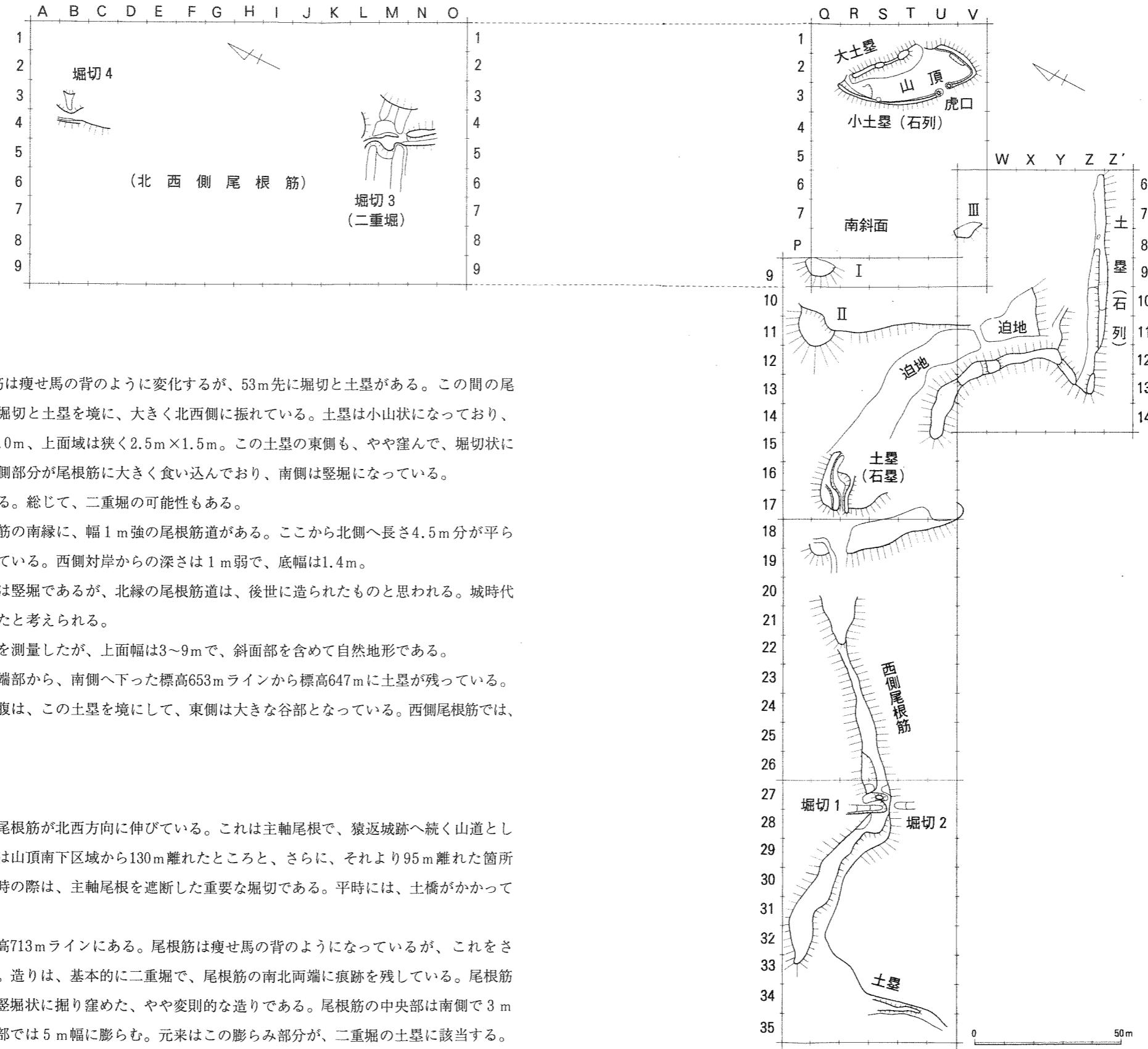
第14図 米の山城跡全体測量図①



第14図 米の山城跡全体測量図①



第15図 米の山城跡全体測量図②



第16図 米の山城跡グリッド設定図

#### 西側尾根筋と堀切

標高675mラインから、尾根筋は瘦せ馬の背のように変化するが、53m先に堀切と土塁がある。この間の尾根筋は直線的に伸びているが、堀切と土塁を境に、大きく北西側に振れている。土塁は小山状になっており、全体の長さは8m、幅は2.5~3.0m、上面域は狭く2.5m×1.5m。この土塁の東側も、やや窪んで、堀切状になっている。現況の堀切は、北側部分が尾根筋に大きく食い込んでおり、南側は堅堀になっている。

両者の間を尾根筋道が通っている。総じて、二重堀の可能性もある。

〔堀切1〕 北側箇所で、尾根筋の南縁に、幅1m強の尾根筋道がある。ここから北側へ長さ4.5m分が平らで、その先は、堅堀の様になっている。西側対岸からの深さは1m弱で、底幅は1.4m。

〔堀切2〕 南側箇所で、現況は堅堀であるが、北縁の尾根筋道は、後世に造られたものと思われる。城時代は、一つに繋がった堀切であったと考えられる。

〔北西側尾根筋〕 長さ58m分を測量したが、上面幅は3~9mで、斜面部を含めて自然地形である。

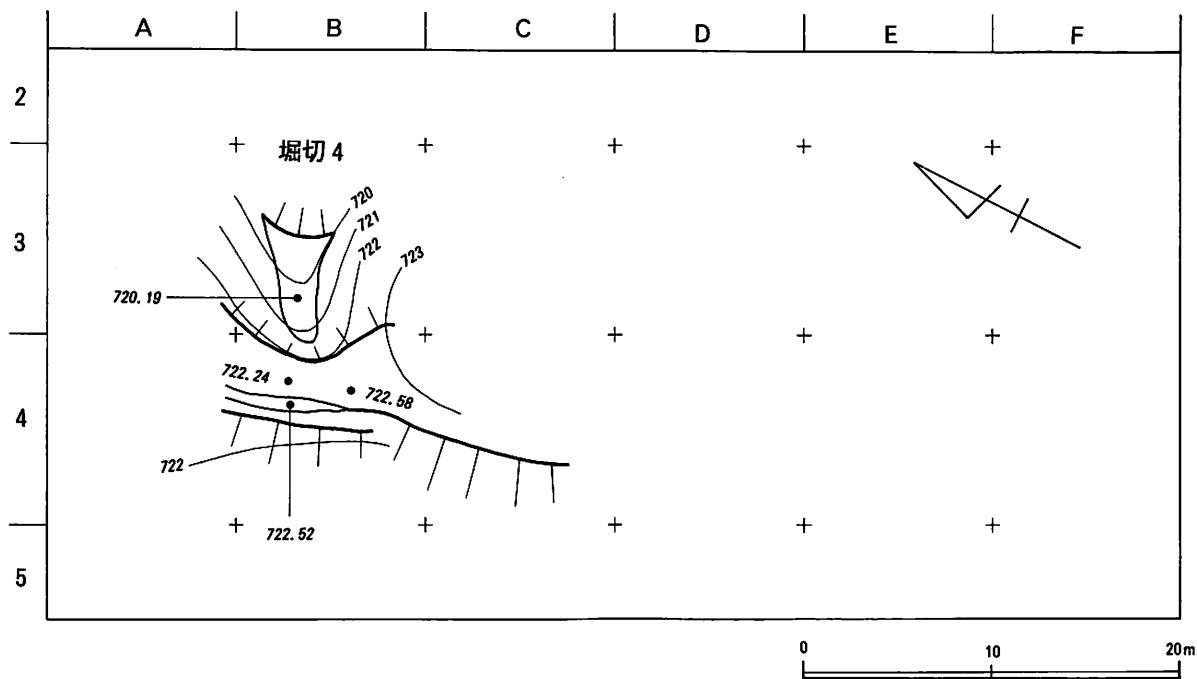
〔土 塁〕 北西側尾根筋の西端部から、南側へ下った標高653mラインから標高647mに土塁が残っている。長さ17m、上面幅3~1.5m。山腹は、この土塁を境にして、東側は大きな谷部となっている。西側尾根筋では、この土塁を最後とする。

#### 北西側尾根筋と堀切

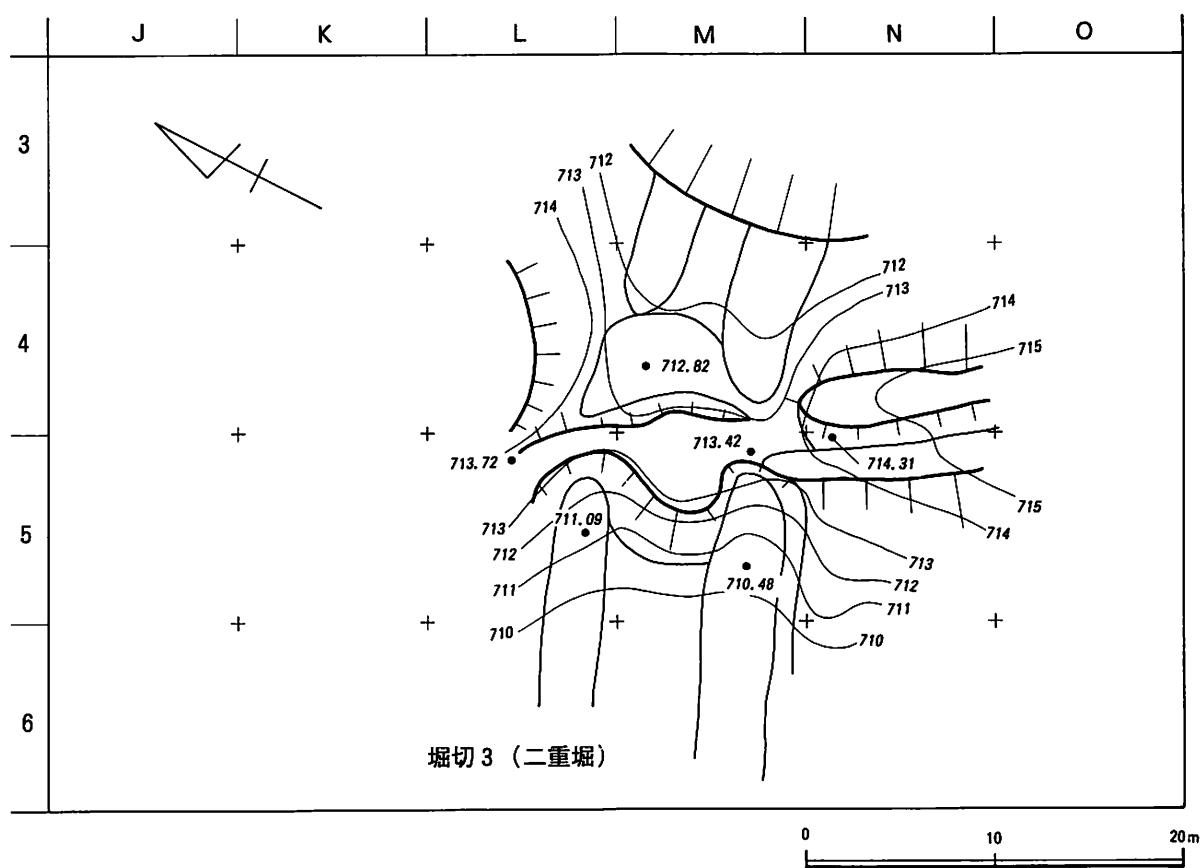
山頂直下からは、もう一つの尾根筋が北西方向に伸びている。これは主軸尾根で、猿返城跡へ続く山道として利用されている。この箇所には山頂南下区域から130m離れたところと、さらに、それより95m離れた箇所に2本の堀切が残っている。戦時の際は、主軸尾根を遮断した重要な堀切である。平時には、土橋がかかっていたものと思われる。

〔堀切3〕 手前の堀切で、標高713mラインにある。尾根筋は瘦せ馬の背のようになっているが、これをさらに狭める堀切が造られている。造りは、基本的に二重堀で、尾根筋の南北両端に痕跡を残している。尾根筋の中央部を掘り残し、斜面部を堅堀状に掘り窪めた、やや変則的な造りである。尾根筋の中央部は南側で3m幅、北側で2m幅に括れ、中央部では5m幅に膨らむ。元来はこの膨らみ部分が、二重堀の土塁に該当する。堀切3は南北10m幅の範囲にある。

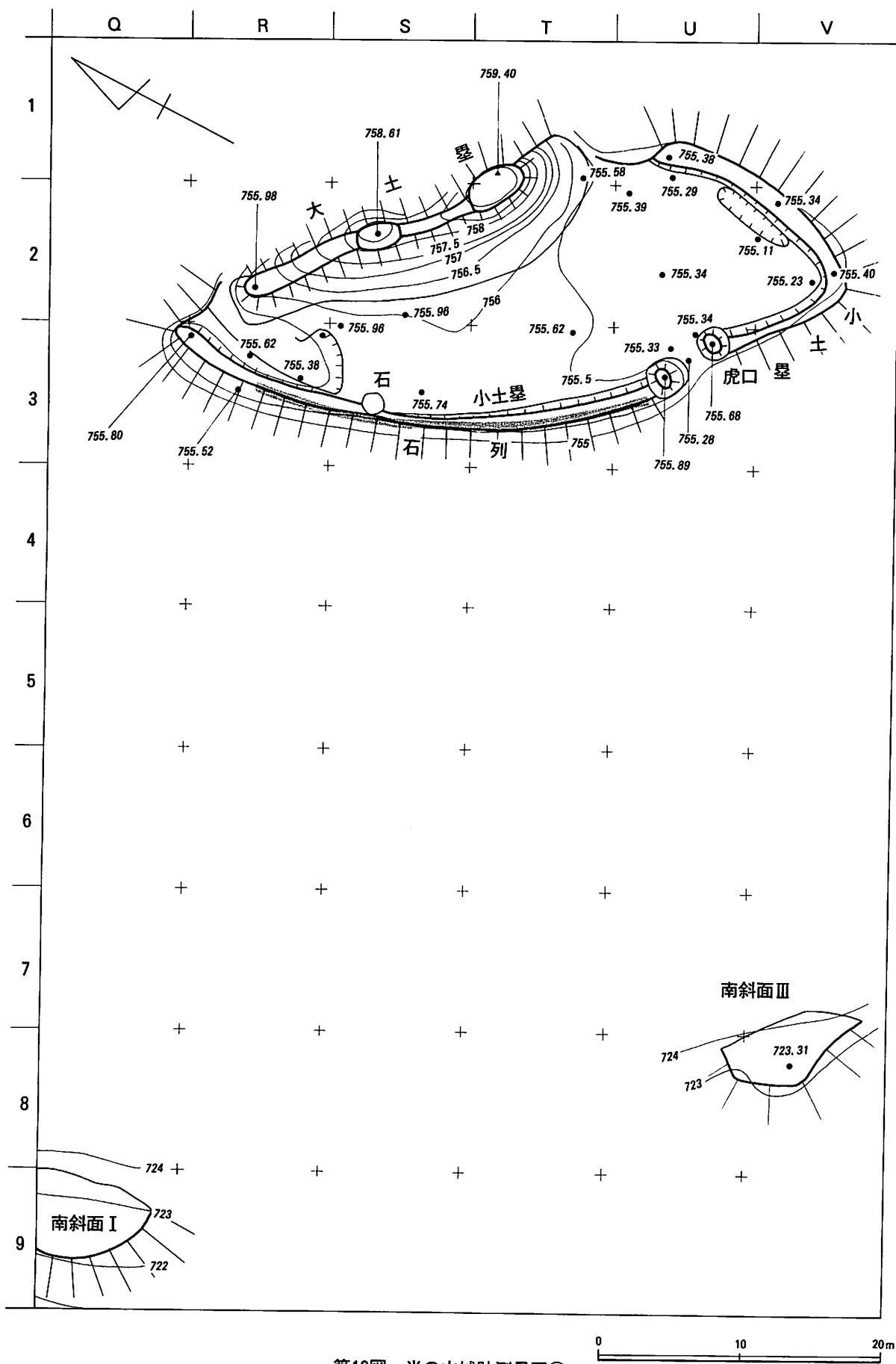
〔堀切4〕 先の堀切で、標高720mラインにある。造りは堀切3と同じで、尾根筋の中央部は2m幅に掘り残されている。東側の斜面には、堅堀状の遺構が、はっきりと残っているが、西側は崩壊している。



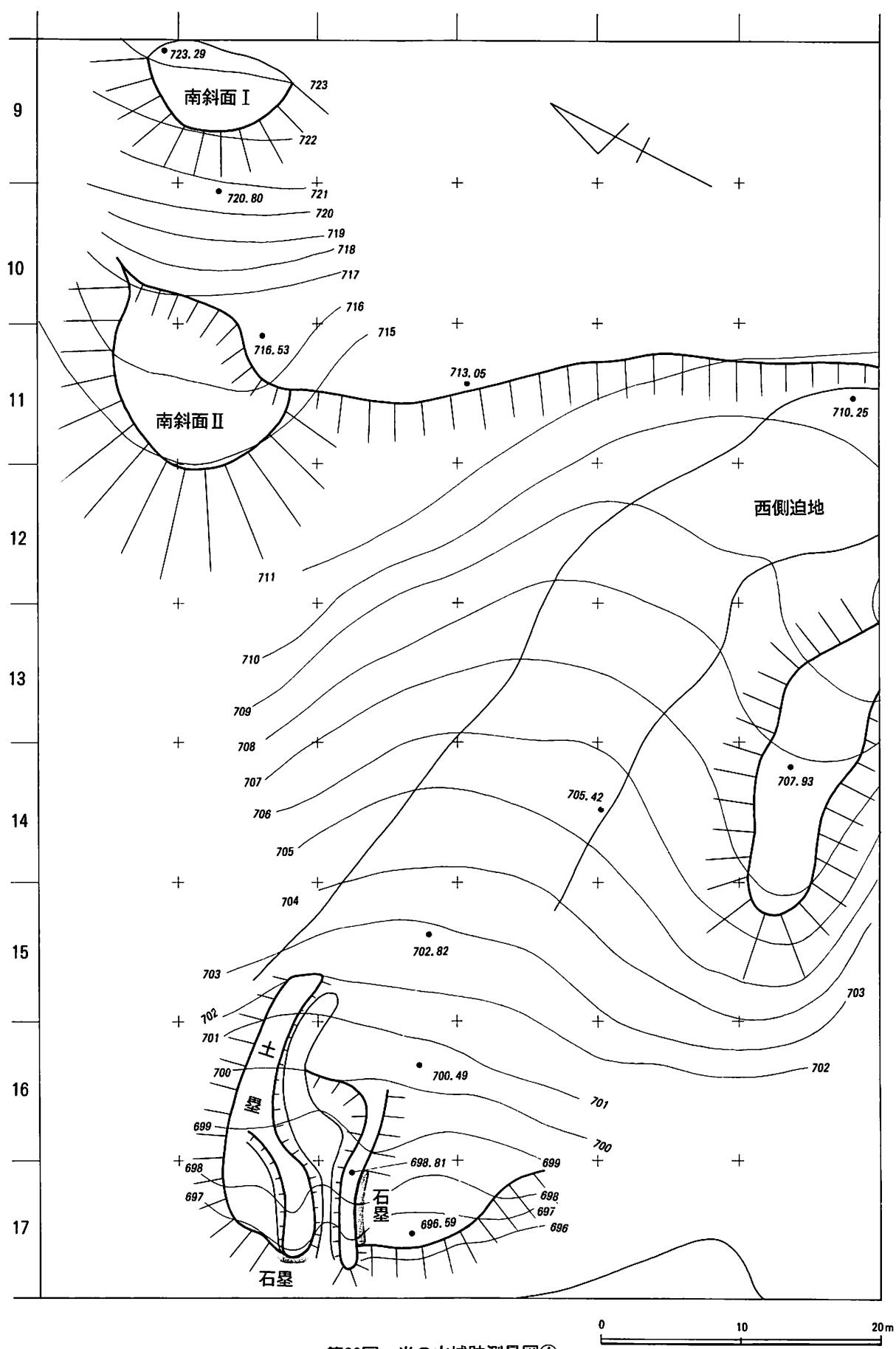
第17図 米の山城跡測量図①



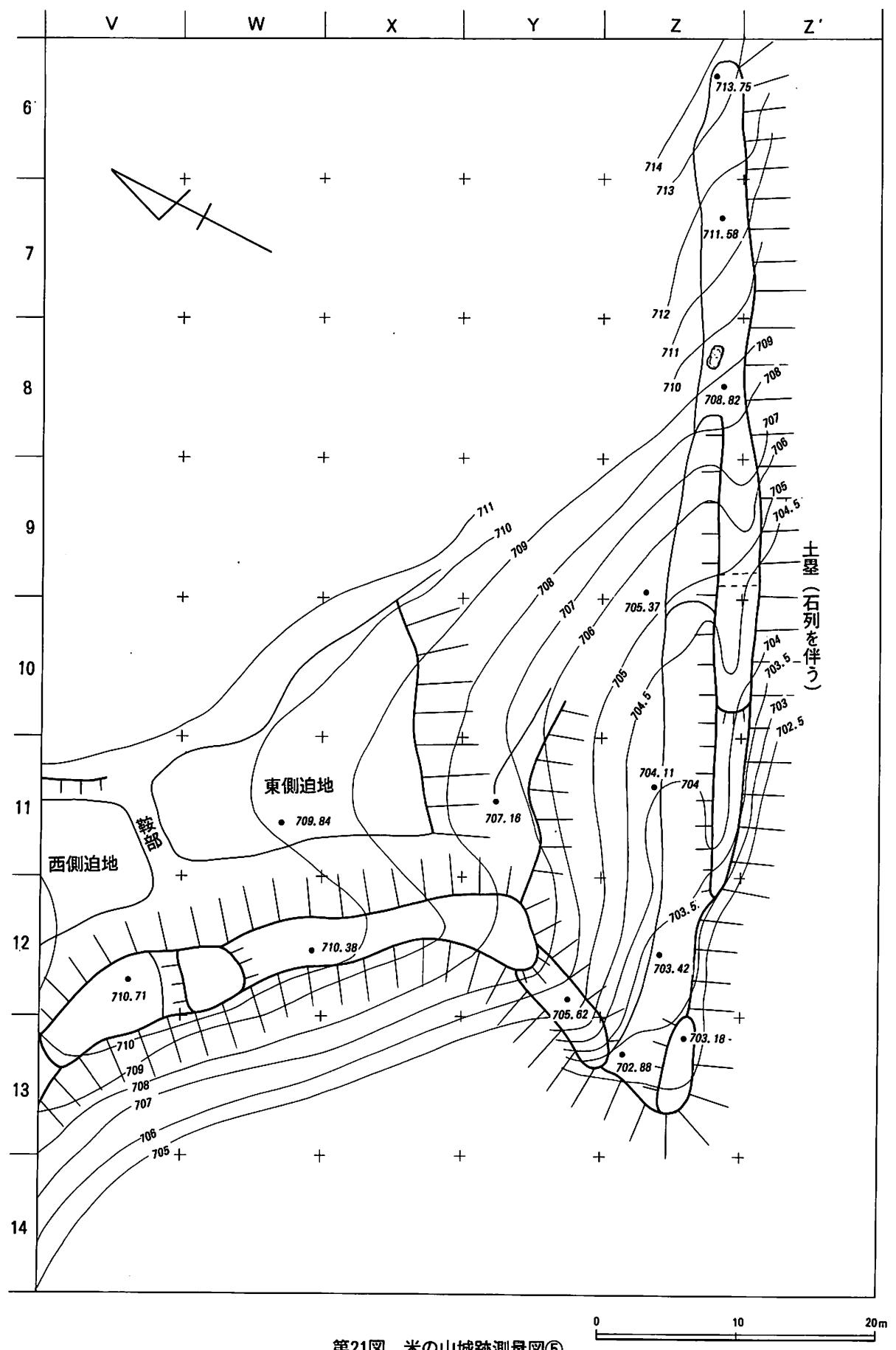
第18図 米の山城跡測量図②

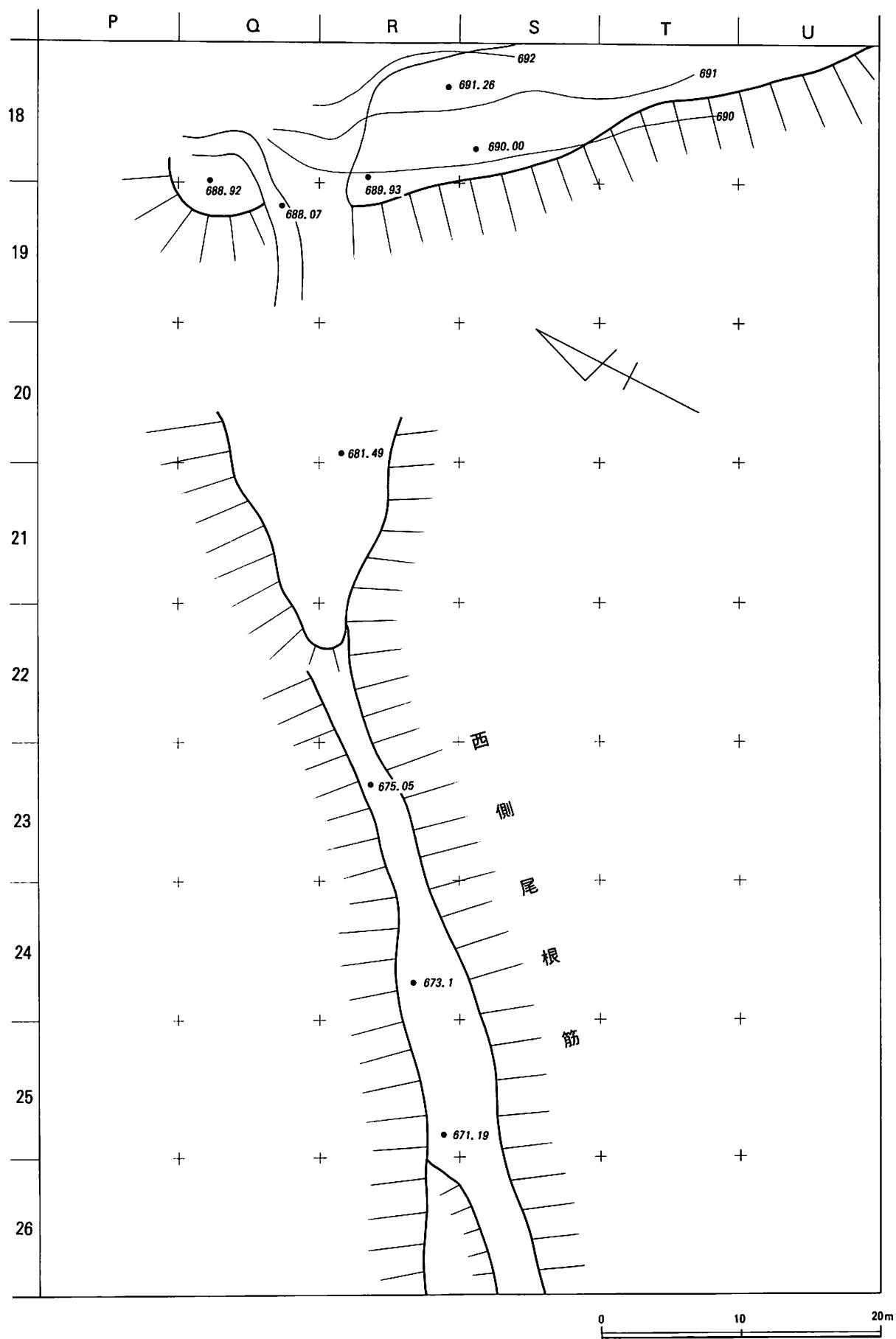


第19図 米の山城跡測量図③

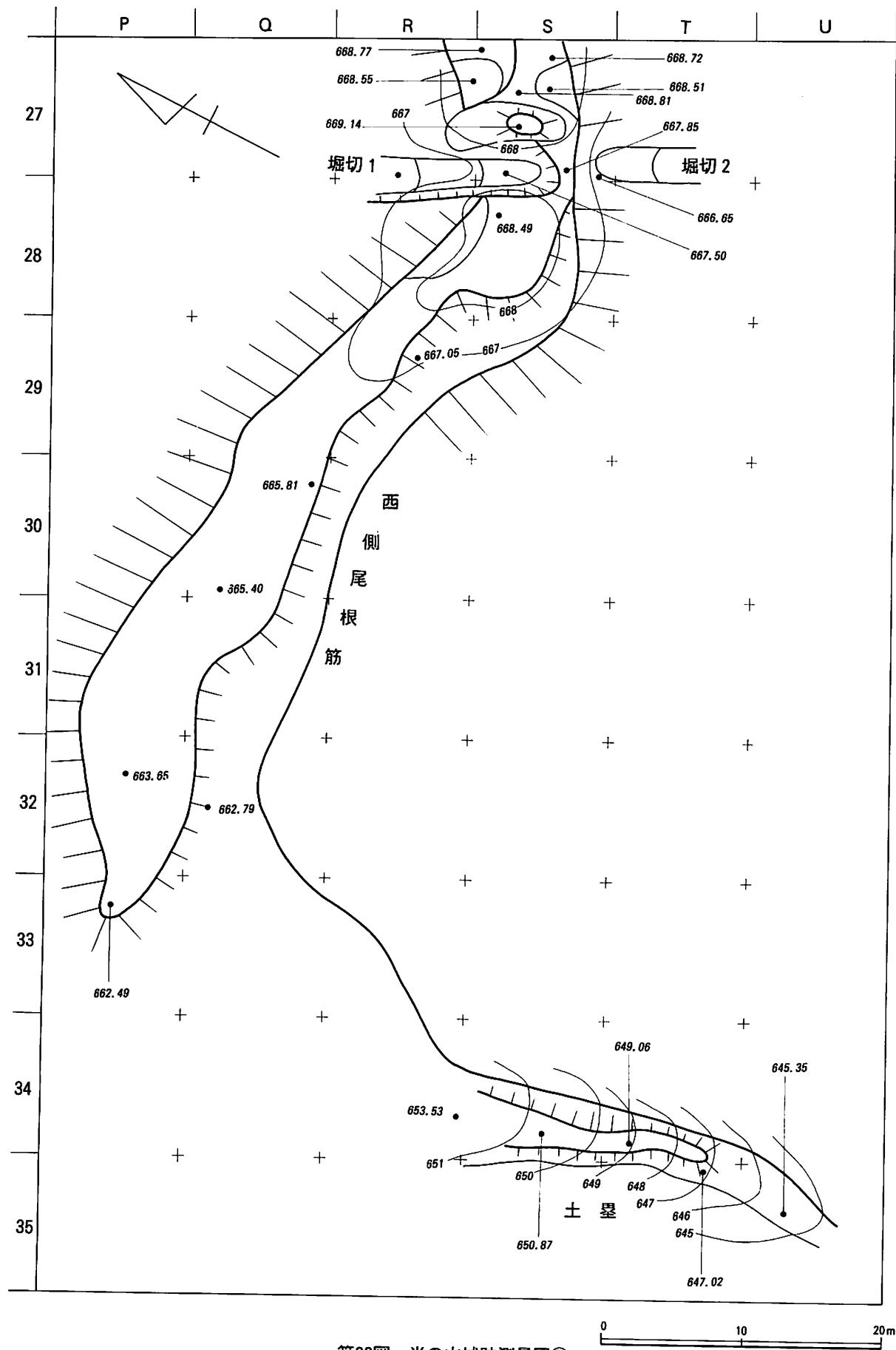


第20図 米の山城跡測量図④





第22図 米の山城跡測量図⑥



第23図 米の山城跡測量図⑦

0 10 20m

## 第Ⅲ章 ま と め

隈部館を中心に、3つの砦が配置されているが、いずれも高所にあったため、遺構の残存状況は極めて良好である。平成8年度は、菊鹿町に所在する猿返城跡と米の山城跡の測量調査を実施した（標高646.8mの山頂にある虎口城跡は菊池市に所在しており、調査を見送った）。

① 猿返城は隈部館に直接関係する砦である。山頂からは、北方下に矢谷渓谷を鳥瞰する事ができる。この渓谷には、菊鹿町から大分県の中津江村に至る山越え道が通じており、「番所」・「威」の地名を残す集落も残っている。宿ヶ峰尾峠を越えれば、大分県である。この渓谷は、中世から国境の要所で、猿返城の山頂から、この方面を監視できる事は、大きな意義がある。

一方で、猿返城の南西斜面部に連なる削平地は、明らかに隈部館を意識して造られたものである。登城道沿いに造られたこれらの人工的な区画の中に、縁に土壘を積み上げたものもある。この箇所に限っては、濠の埋没が考えられる。総じて、山腹から進入してくる敵を阻止する防御施設と思われるが、「このような高所に何故、必要なのか」という疑問は拭いきれない。散兵線もしくは武者溜り的な平場であろうか。

有事の際は、猿返城経由で米を館へ運び込んだという伝承（元菊鹿町文化財保護委員長の木庭春生氏の言）にも耳を傾ける必要がある。補給ルートの役割りも荷なっていた事が伺われて、興味深い。

立地的にも、隈部館の砦そのもので、「肥後国誌」がこれらを一括して「猿返城」と称している事は明らかである。猿返城を館部分と砦部分に大別するのが、最も妥当な考え方であろう。

② 米の山城の存在意義の一つは、本文でも述べた様に、山頂から虎口城と共に、菊池方面の山間部が眺望できる点である。この方面は、猿返城からは死角に当たるので、米の山城の存在は、非常に大きい事がわかる。虎口城を含めると、極めて広域的な防衛網が形成できる。これらの城も、猿返城の範疇に入るが、「肥後国誌」が猿返城と別途に扱っているのは、距離的な隔たりによるものであろう。

③ 隈部館跡—米の山城跡—猿返城跡を結ぶ尾根筋の山道は、兵士の広域的な移動が、可能な事を意味している。この事から猿返城は、「伝え」もしくは「繁ぎ」の砦で、米の山城は「詰めの城」という見方もできる。事実、米の山城には、山頂直下の尾根筋に、礎石建物跡らしきものが残っている。同箇所には、大規模造りの石壘も残存しているところから、単なる物見だけの砦跡でない事だけは、確かである。相当数の兵士が籠城できるだけのスペースもあり、平時においても、常時、兵士が常駐していた可能性がある。ちなみに東方向の虎口城は、山容と距離的なものから、猿返城と同様な「伝え」もしくは「繁ぎ」の砦であったと思われる。

④ 館と砦が所在する上永野地区は、純山村で、静かなたたずまいと自然が今に残っている。登城道も現存し、地名についても、中世の城下町（麓集落）に関連するものが数多い。現在、隈部館跡のみが県指定史跡であるが、今後、指定の範囲を猿返城跡と米の山城跡まで拡大する必要があろう。

## 近世・近代の文献に見える猿返城跡・米の山城跡

### 「古城考」

#### 米の山古城

山鹿由来記に、宇野七郎親徳築之と云々、隈部式部太輔親廣、米の山鶴巣に館を築て居之云々、土俗の説に、隈部親廣在城の時、鳴津兵士來て攻之、城中水乏し、薩兵是を知て、敢て急に不攻、故城兵殆んど困苦す、親廣謀て、城外より見ゆる高場の所にて、旦暮白米をもつて馬を洗ふ事夥し、寄手数日見之、城内兵糧多く、且つ水の手多き事案外也、中々急に攻ても難陥かる城に、日數を重て無益とて、人數班せし故、米の山の城と稱すと云、

(『肥後国志』も同一内容の記載文であるが、隈部式部太輔親廣につき、親永の誤りかと但し書きがある。さらに、文末に「府より行程八里也」と書き添えられている)

#### 猿渡古城

上長野村にあり、險阻の地也、城主隈部但馬守親永也、永禄二年、隈部親永、隈府の城に行て、赤星道雲に對話し、此般木野彌次郎親政討死し家絶えて、上知八十丁、私館に近し、某に給るべし、左も有らば田底八十丁を替地に進すべしと云へば、赤星敢て不肯して謂けるは、去る弘治二年、永野近所也とて、阿佐古宮原を乞ふに任す、又今木野を望む事、遠慮なしとて不承引、隈部大に憤り、是より赤星を可討策を運らしぬ、道雲是を傳へ聞て、逆寄すべしと相謀り、幕下の國士へ觸廻し、家人赤星中務を大手の將として四百餘人、赤星藏人を掲手の將として四百、其身は宗徒七百人引率し、永野城に押寄る、親永は、豫て期したる事故百餘人にて出向、衆寡元より敵しがたく、幸屈強の切所は、山前は古閑川を隔てて、池田村灰塚に陣を取る、赤星は大勢を引率し、米原金塚に打出、敵陣の小勢を見て心驕り、手に入れて揉崩さんも、安かるべしと荒言し、木山大森の村路に入りて憩息す、藏人は今般の戦、味方衆軍を憑んで、不虞の負有るべしと深く思ひ、四百餘人引具し、隈部が陣の向なる道場に陣を取り、夜に入ければ、兩陣烽火を焼連ぬ、翌れば五月二十一日、隈部赤星川を隔て三丁計り、隈部方より矢玉を發す赤星も放返し、抜連れて蒐る、藏人は三尺七寸の刀を振つて、多勢が中に駆入る處を、時雨のごとく放つ玉箭、藏人に中り、馬より逆に落ければ、隈部が軍士一度に瞳と突懸る、藏人が四百餘人、大將は討るれども、炎天停午汗流して漿をなし、眼暗み息喘き、二時計の戦に、寄手は悉く討死し、二十餘人に討成さる、今其所を合瀬川と云、道雲方には、此敗弊を不厭う、多勢を頼み手を不碎、徒に見物す、既に日數十餘日迄、攻撃の沙汰もなく、晝夜酒宴のみして打暮、同晦日、殊更大雨頻りなれば、彌怠り帶紐解きて、酒肴を弄し居たるを見て、隈部が入れし忍の者、如是と告しかば、親永老臣富田安藝守に命じ、夜討すべしと、相言を定め、枚を含んで、酉の刻に六百餘人、赤星が陣營に推寄せ、闇を作つて突懸る、赤星が營室は元より懶惰なりしかば、大に周章擾亂す、隈部勝に乗り、追討して首數八百餘級を得、心の外に討勝て、内浦に堡六カ所の要害を構へ、城代をこめ、永野鶴巣兩城を築き、武威國中に輝けりと云、

(『肥後国誌』には、「永野猿返城附録」として同一内容の記載がある)

## 「国郡一統志」

米山城

猿歸城

鶴巣城 (親)  
右四所隈部但馬守鎮永居之天正年中入菊池城

## 「肥後國誌」(卷之七 山鹿郡 中村手永)

### 宮崎莊上永野村

米山城跡 山鹿由来記ニ宇野七郎親治築之云々隈部式部太輔親廣 (鶴巣家) 記 米ノ山鶴ノ巣ニ館ヲ築テ居之云々土俗ノ説隈部親廣 歎 在城ノ時島津ノ兵士來リテ攻之城中水乏シ薩兵之レヲ知テ敢テ急ニ不攻故ニ城兵殆ト困苦ス親廣謀テ城外ヨリ見フル高陽ノ所ニテ旦暮白米ヲ以テ馬ヲ洗フ】夥シ寄手数日見之城内兵糧モ多ク且ツ水ノ多き】案ノ外也中々急ニ攻テモ難陥城ニ日數ヲ重ネテ益無シト人數ヲ班セシ故米ノ山城ト稱スト云府ヨリ行程八里也

猿返城跡 永野城トモ云山鹿由来記云隈部親長所築險要ノ地也云々或記當城ハ上永野村ニアリ隈部但馬守築之在城ノ時永祿二年四月當城ヨリ六百餘兵ヲ師テ菊池郡池田灰塚ニ出張シテ敵將赤星道雲カ七百ノ勁兵赤星藏人星子中務カ八百ノ兵士ヲ追崩シ凱歌ヲ唱フ是ヨリ隈部大ニ武威ヲ振ヘリ此城跡大手柵形ノ跡城ノ礎石并若殿 親安カ事歟 ノ部屋ノ跡庭石泉水ノ跡花園ノ跡等干今歴然タリ近世此地ノ草木ヲ取レハ祟リ有トテ土人太夕怖之魑魅ノ所爲歟最モ險要ノ地也親永平日ノ所居ハ城外ニアリ館ト云府ヨリ行程八里也

### 宮崎莊上内田村

鶴巣城跡 隈部氏系図ニ隈部式部太輔親廣 (鶴巣家) 記 山鹿郡米ノ山鶴ノ巣ニ館ヲ築テ居之云々山鹿由来記ニ當城ハ隈部但馬守親永所築也云々赤星軍談云隈部親永永祿三年ヨリ天正五年迄十八ヶ年當城并永野城ヲ構ヘテ守拒ノ專要トス云々當城ハ矢谷ニ近ク隈部親永在城ノ頃薩軍再三進ミテ急ニ攻レ疋城郭堅固ニ防禦強ク終ニ城ヲ不拔ト云

(補) 事蹟通考編年考徵卷九天正七年ノ條ノ考按ニ云菊池傳記ニ云此年三月島津ノ將新納武藏守梅北宮内左衛門本郷能登來リテ隈部親永カ隈府城及城村永野鶴ノ巣ノ四城ヲ攻 俱ニ山鹿郡ニアリ城村ハ嫡子親安永野ハ家臣富田家治鶴東ハ幼頃亡 翌八年正月河上左京來リ加リ九年十一月迄攻レ疋一城モ落サリケレハ圓ヲ解テ引取ケル云々然レ疋其比ハ龍造寺ノ勢強ク玉名菊池山鹿山本合志五郡ノ將曹其麾下ニ属スルコトナレハ薩軍遠ク敵中ヲ經テ久ク兵ヲ隈府ニ出スコト世錄記ニモ不載之其是否考質スル所ナシ故ニ不取之云々

「肥後国誌」(卷之六 菊池郡 深川手永)

北通郡 虎口村

虎口城跡 隅部氏ノ城ト云隈部誰某ノ居城ノ跡ト云コト不分明親永カ城跡ト云ハ非也

附録曰虎口村ノ北ニ高城山米ノ山トテ城跡アリ鎮西八郎爲朝ノ城跡ト云

(補) 翁菴按ニ大友興廢記ニ天文二十年大友義鎮肥後ニ發向シ隈部彌次郎親次カ籠タル八方ケ嶽ノ城ヲ攻落ストアリ虎口村モ八方ケ嶽ノ麓ニアレハ此等ノ記ニ因テ隈部氏ノ城ト云ルナルヘシ虎口半尺兩村城跡ノ事ハ半尺村ノ條ニ補記ス

「肥後国山鹿郡村誌」 「肥後国山鹿郡上永野村」

古跡図添 猿帰城墟 村ノ艮膳鼻山ノ西山ニ拠ル 三方絶嶮只南方登ルヘシ 絶頂平地アリ長二十間幅三間夫ヨリ漸夷シテ平地アリ 其下坤ノ方堅堀切七行アリ長三十間甚不深 其下断岸 城門ハ南ニ面ス隈 部親永所築 山鹿由来記 東西十八間南北六間高五百五十六間 古記集覽肥後志 興廢年月不詳

全 隅部親永古宅趾 猿帰城ノ坤ニアリ 東西五十間南北四十間 礎石城門ノ迹等猶残レリ 表口ハ塙ヲ設クル三重 裏ハ二重ノ小塙アリ 村民親永ヲ祀ル石祠ヲ建リ 親永天正十五年七月佐々成政ニ背キテ菊池郡守山城ニ拠ル 不克シテ其男隈部親泰カ居城城村ノ城ニ走リ之レヲ守ル 成政之レヲ攻レトモ落チス十二月秀吉公ノ命ニヨリ城ヲ出テ親永ハ柳川親泰等ハ小倉ニ預ケラレ 十六年四月二十七日皆死ヲ賜フ 佐々成政事蹟考

全 米山城墟 膳鼻山ノ東ニアリ 高山ニ拠ル絶頂平地長二十一間横五間 南方下ルコト四十間甚嶮也其下東西壱丁南北三十間平坦外断岸ナリ 城門ハ坤ニ面ス 城域東西二十二間南北八間高四百間 古記集覽肥後志 隅部式部太輔武治城主タリ 専立時記ニ鶴城主トアリ 鶴城ト云ルハ當然ナラン 其孫親広ニ至リ薩軍攻之城中水乏シ 親広乃チ高丘ニ於テ旦暮精米ヲ以馬ヲ洗フ 薩軍望テ城中水多シト聞ヲ解テ班ル 因テ米山城ト称ス 肥後志土俗記 興廢年月不分明

「山鹿郡中村郷地誌調」 「第六大区六小区 上永野村」

一猿返城跡ハ膳鼻山ノ西ニ有高山也 三方ハ嶮岨ニシテ登ルヘカラズ 南一方漸ニ登ルヘシ 絶頂ニ長ニ十二間幅三間半計ノ平地アリ 是ヨリ段々下リニ平地アリ 南西ニ切岸アリ 切岸ノ上ニ堅堀七筋アリ長三十間計深二尺ハカリニシテ広カラス 城戸内周廻五町ハカリ也 西ノ方館迹ヨリ登リ拾三町程也城迹高二十五町計也 膳鼻ハ城迹ヨリ高キコト一町其間五町計也 南ニモ山アリ城迹ヨリ低キコト一町其間五町程也 此城ヨリ東十町計ニ米山城アリ 北二十町計ニ鶴巣城迹見エタリ 米山鶴巣ニモ此城ヨリ通フ道アリ 米山ニハ膳鼻通り鶴巣ニハ帆柱石通り也 古城考ニ曰ク猿返古城は隈部親永城主也 親永は宇野七郎親治カ子孫ニテ菊池最初の家老筋也親永以前に隈部上総介忠直 番目忠直墓ハ高野瀬村田辺ニ在ト承 と云もの有り 菊池持朝為邦重朝を補佐し文武の名を得たる人也 文明八年重朝藤崎宮に於て千句の連歌を興行し 詩歌を詠せた

る忠直も著述あり其時忠直藤崎宮草創の由来を漢字に書たる文章あり 又合志福本村八幡宮宝殿棟柱の文ハ阿佐古式部少輔武貞ニ代りて忠直自作自筆也 五山名僧詩集中ニも忠直見たりト云リ 城主ハ館迹ノ条ニ弁ス

一米山古城跡ハ膳鼻ノ東ニアル高山也 絶頭ニ長二十一間横五間計ノ平地アリ 下ルコト四十間甚嶮也此下ニ平地アリ 長六十間横三十間ハカリ也 東ニ切岸ニ重西ニ切岸ニ重アリ 南北は甚嶮也 西ト南ニ城戸堀切岸アリ 城戸ノ内周廻五町程也 二ノ城戸堀切アリ 地志略ニ曰ク米山城跡ハ上長野辺ニあり 宇野親治カ築く処也 古城考ニハ城主隈部親永トアリ 専立寺記ニハ隈部式部大輔親広米山鶴巣ニ住ストアリ 事蹟考ニ曰ク大友興廢記ニ曰ク天文二年大友義鎮肥後に発行して隈部弥三郎カ籠たる八方嶽の城を陥すとあり 八方嶽城ト云ハ米山ナランカ村民伝テ曰米山城ヲ攻ラル、時米ヲ以テ馬ヲ洗フ敵見テ謂ラク此高山ニ水沢山ナリ攻落スコト難シトテ引返ス故ニ米山ト云ト云リ

一隈部館迹ハ本村ヨリ東北拾八町ニアリ 猿返城ノ下也 東西五十間南北四十間計ノ平地也 表口門迹上リ 口石段礎泉水立石等顯然残レリ 表ハ切岸高ク堀深ク外堀モ嚴重也 裏ハ堀ニ重アレトモ狭浅也 此館迹讒三百歳ノ昔ヲ見ルニ質素儉約ナルコト後世ノ奢美ヲ戒ルニ足レリ 庶幾ハ之ヲ破却スルコトナカラン 隈部氏ハ宇野七郎親治七代ノ孫持直白木須賀山ニ居館シ隈部氏ト称ス 此年文永元年 甲子 二月也ト富田系図ニ見エ 又専立寺系図ニハ式部大輔武治永野城主ト見タリ 武治父親経ノ墓蔵音寺ニアリ親経男武治其子貞明墓其子親家墓清潭寺ニアレハ武治永野居城トアルニ依ヘシ 親家男親永ハ赤星親家ト逢瀬川ニ戰ヒ又薩州及佐々成政ト隈府城ニ戰テ勇名アリ 天正十五年 丙子 十二月秀吉公ノ命ニ依テ親永ニ男親房ト共ニ柳川ニ至ル 同十六年 戊子 四月二十七日親永一族自殺スト事蹟考ニ見タリ

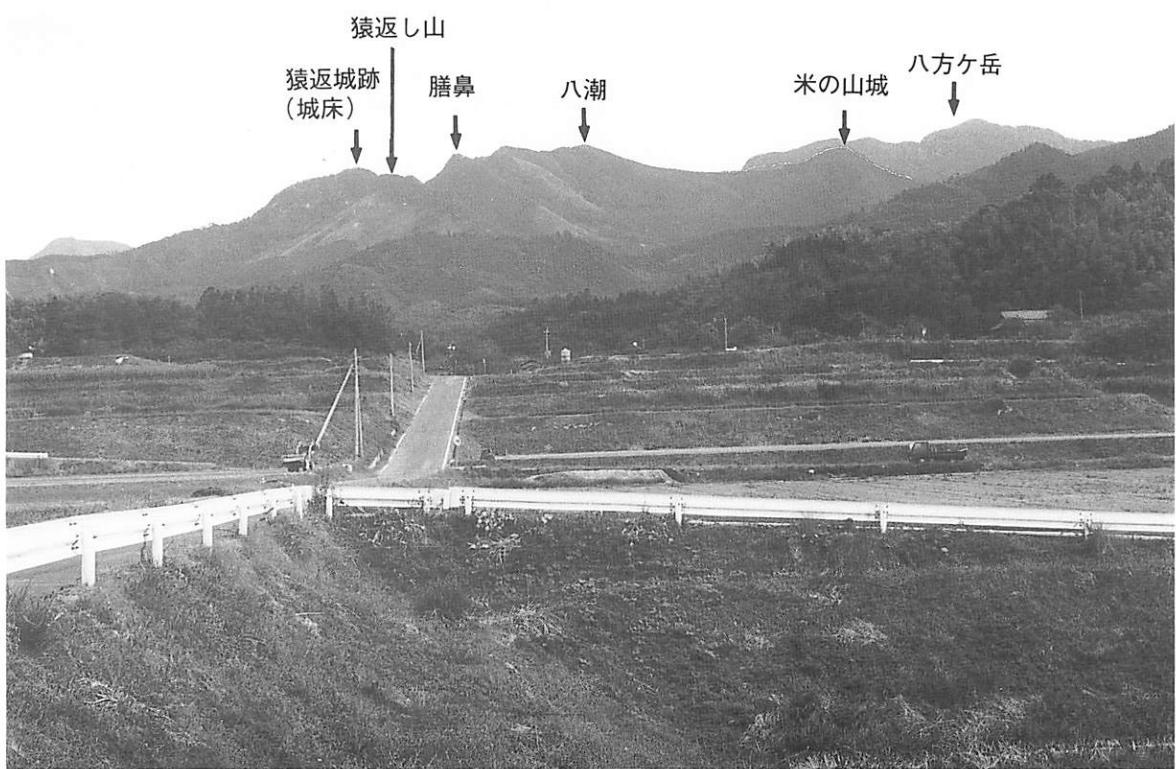


# 写 真 図 版





図版1 猿返城跡・米の山城跡・八方ヶ岳 遠景（七城町から望む）

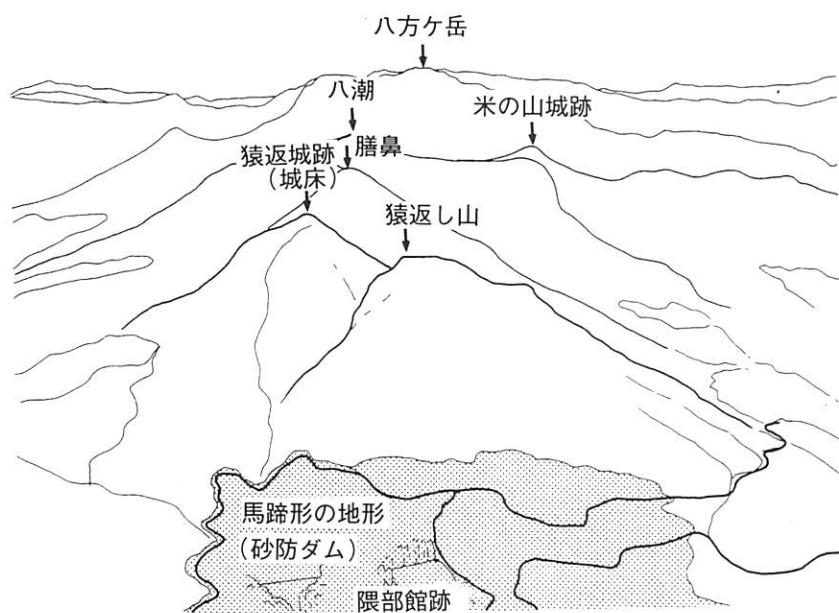


図版2 猿返城跡・米の山城跡・八方ヶ岳 遠景（下永野地区から望む）



図版3 航空写真

猿返城跡・米の山城跡・八方ヶ岳



図版4 八方ヶ岳・米の山城跡

北東側の深谷

(米の山城跡から望む)



図版5 虎口城跡〔菊池市〕  
(米の山城跡から望む)



図版6 隅部館跡・桑原・高池地区  
(猿返し山から望む)



図版7 隅部館跡 航空写真



図版 8 猿返城跡 遠景  
(年山地区から望む)



図版 9 猿返城跡 遠景  
(桑原地区から望む)



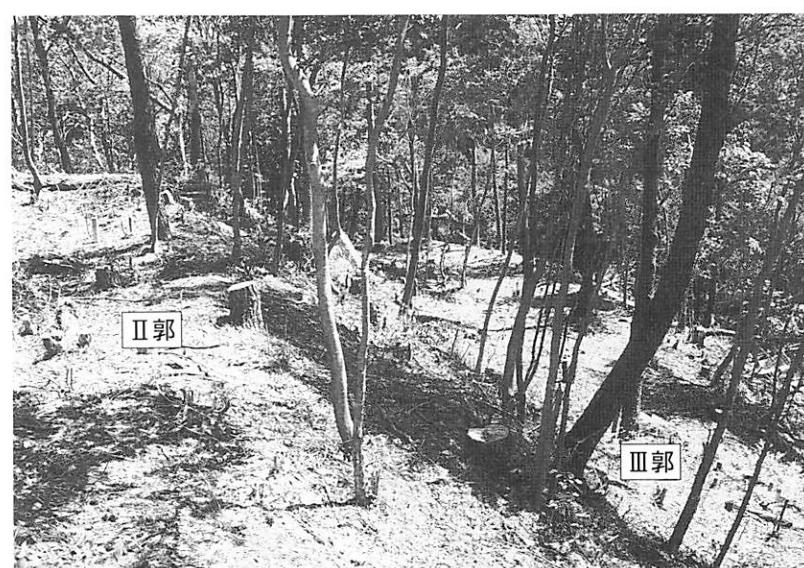
図版10 猿返城跡 城床  
(猿返山から望む)



図版11 猿返城跡 山頂土壘



図版12  
猿返城跡 II郭の濠跡と土壘



図版13 猿返城跡 II郭とIII郭



図版14 猿返城跡 Ⅲ郭と巨石



図版15 猿返城跡 Ⅴ郭-①



図版16 猿返城跡

野首地形の南東下・登城道



図版17 猿返山と城床の間の  
登城道（野首地形）



図版18 猿返し山  
(城床のⅣ郭から望む)



図版19 猿返し山 山頂



図版20 登城道途中の平場  
(標高513.2m地点)



図版21 猿返城跡東下の野首地形



図版22 測量調査従事者



図版23 猿返城跡から  
米の山城跡への道



図版24 水汲み道  
(湧水地へ降りる道)



図版25 湧水地の谷間



図版26 湧水地 全景



図版27 湧水地 南端



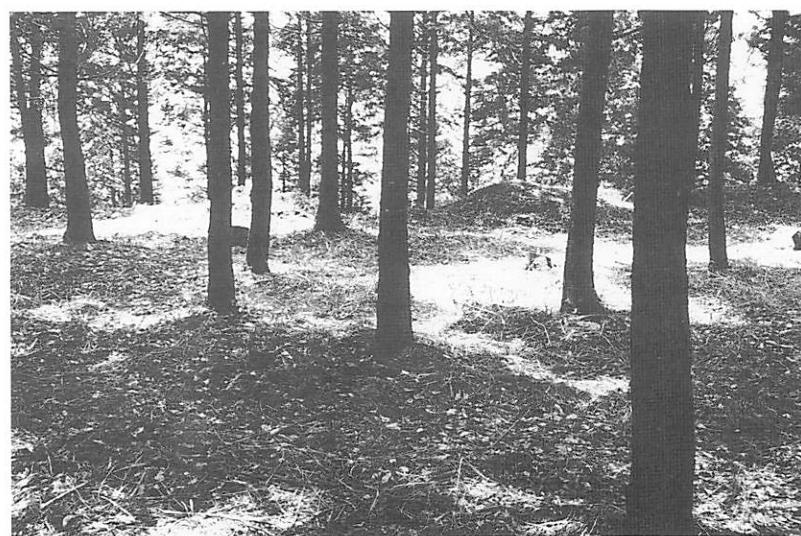
図版28 湧水地 中央部



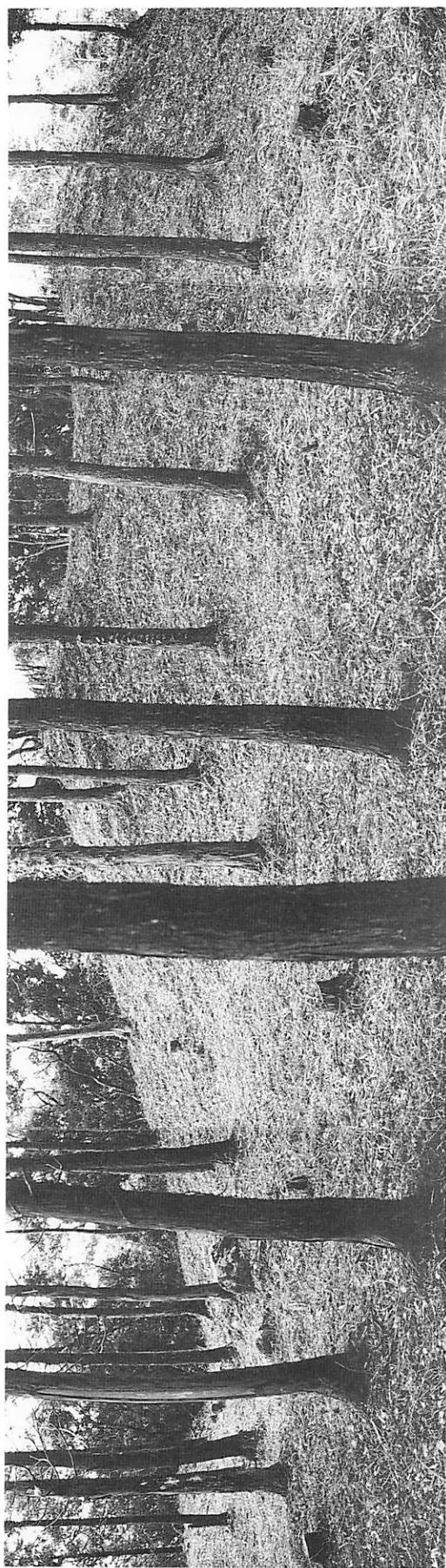
図版29 米の山城跡から  
猿返城跡への道



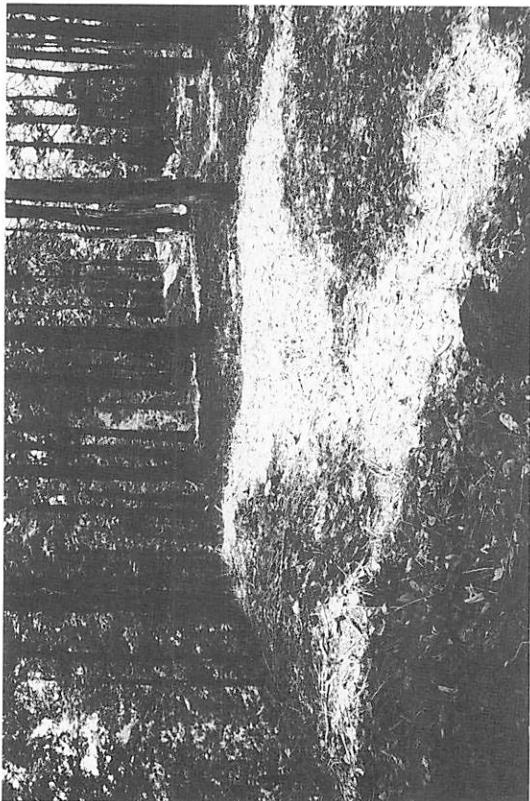
図版30 猿返城跡から見た  
雪景色の米の山城跡



図版31 米の山城跡 山頂 虎口



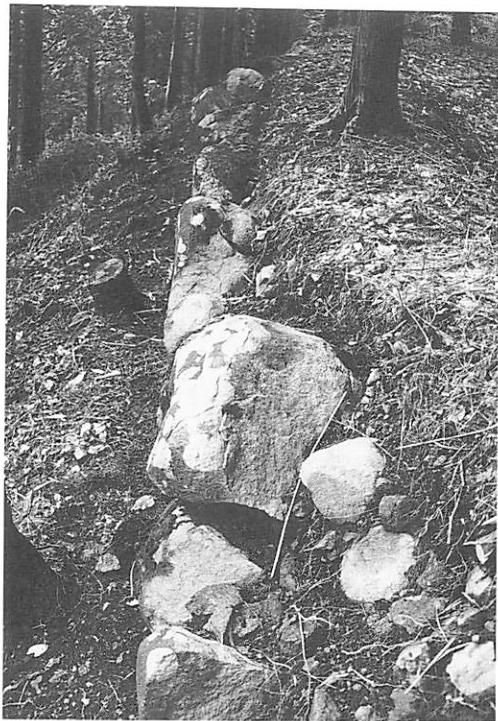
図版32 米の山城跡 山頂 大土塁



図版33 米の山城跡 山頂南端 小土塁



図版34 米の山城跡 山頂南縁 小土塁に伴う石列



図版35 米の山城跡 山頂南縁 小土壘に伴う石列



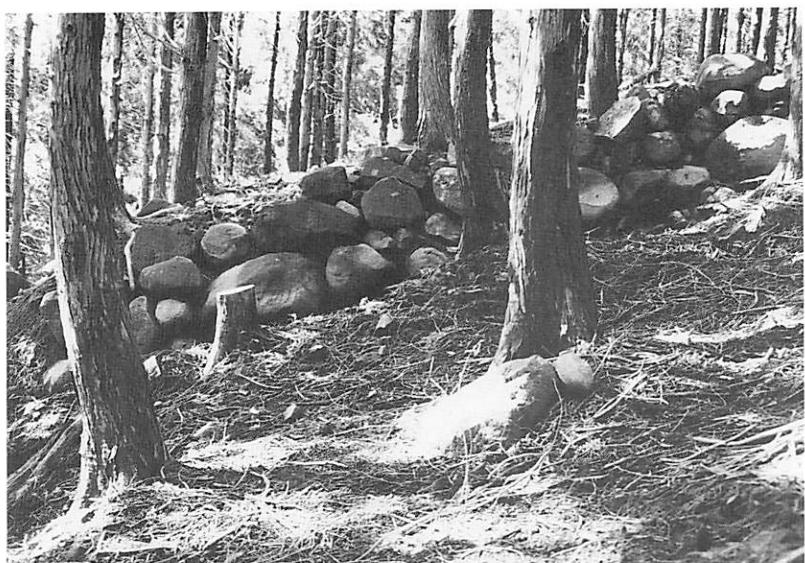
図版36 米の山城跡 山頂南縁 小土壘に伴う石列



図版37 米の山城跡 南斜面平場  
南縁土壘（石壘を伴う）



図版38 米の山城跡 南斜面  
東側小土壘(石列を伴う)



図版39 米の山城跡  
迫地西端部の石壠側面



図版40 米の山城跡  
迫地西端部の石壠正面



図版41 米の山城跡  
迫地西端部 溝池状の凹地



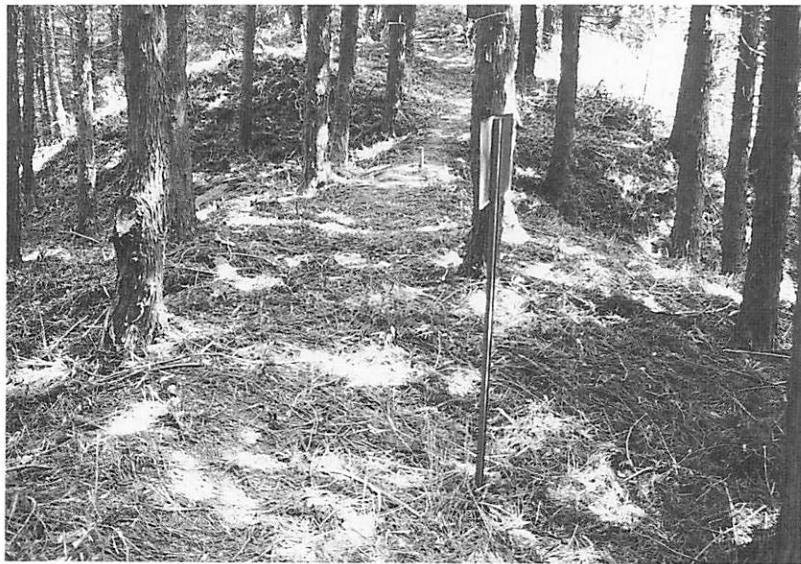
図版42 米の山城跡 堀切 1・2



図版43 米の山城跡 堀切 1



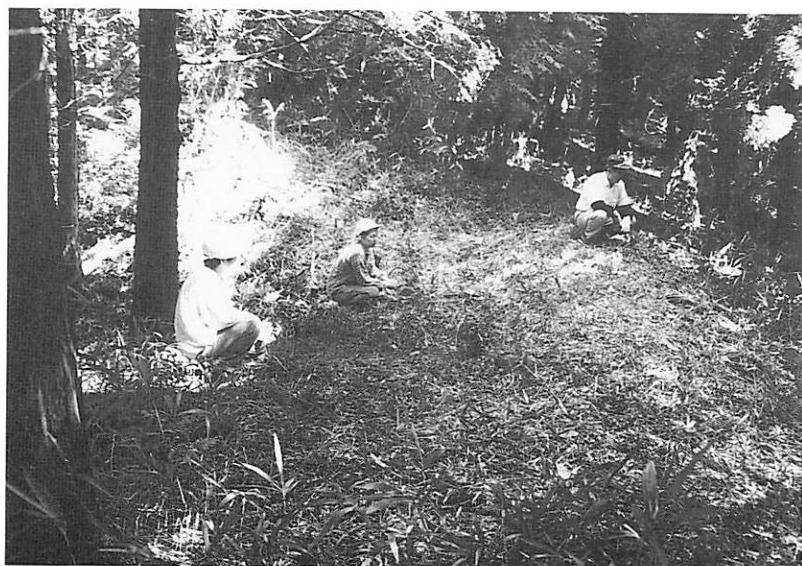
図版44 米の山城跡 堀切 1



図版45 米の山城跡 堀切 3



図版46 米の山城跡 堀切 3



図版47 米の山城跡 堀切 4

菊鹿町文化財調査報告 第3集

猿返城跡・米の山城跡  
隈部館関連の砦跡

平成9年3月31日

[発行]

菊鹿町教育委員会

〒861-04 熊本県鹿本郡菊鹿町大字下内田165  
☎ 0968-48-3115

[印刷]

(株) 大和印刷所

〒862 熊本県熊本市戸島町920-11  
☎ 096-380-0303



## 文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『菊鹿町文化財調査報告第3集 猿返城跡 米の山城跡』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成 17 年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名:菊鹿町文化財調査報告第3集 猿返城跡 米の山城跡 —隈部館跡関連の砦  
跡—

発行:山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話: 0968-43-1651

URL:<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日:2025 年 7 月 7 日